
殺人教会の死神様

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人教会の死神様

【Nコード】

N4362Y

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

教会と呼ばれる宗教団体。だがその正義は殺人によって成り立っていた。死神と呼ばれる武力団体を抱える教会は世界に多大な影響を与え、時には国を滅ぼすほどの力を持っている。対して教会の正義を許さない対抗勢力もまた存在し、抗争を続けていた。主人公カールシアもまた死神と呼ばれる一人であり、教会の命に従って、自身と教会にとっての悪と対抗勢力を排除するため旅を続けていた。

00 竜の国

緋色の目を持つ彼が目を覚ました時、彼は地面に横たわっていた。何が起こったのか、さっぱり分からない……

地面を確かめるように、ゆっくりと立ち上がる。少し眩暈がして、軽く頭を振る。

今の時間が分からない。太陽はもうかなり傾いていて、影が長く伸びる。

ようやく周りを見渡す余裕が出てきた。

が、周囲を見回して愕然とした。

建物が根元だけ残し、吹き飛んだようなあとがいくつもある。

まるで大爆発でも起こったかのようなのである。原型を留めたものがまったく無い。

よくよく見ると、ところどころ黒い影や、赤黒い液体が散ったような、そんな跡ものこっていた。

周りに仲間はいない。

少し周囲を歩いてみるが、やはり誰もいない。最初から何もなかったかのようにだったが、ここは確かに自分のいた国だと思い出していた。

仲間が大勢いるはずの、竜の国。

彼はようやく現状を認識し始めていた。

「人間がやったのか……」

ポツリと言った。

人間がこの国を滅ぼそうと、攻めて来たのをようやく思い出した。とたんに彼の中に焦りが生まれた。

「父上、母上！」

両親の元へ走り出した。
王宮を目指して。

王宮に向かって走っている間に、黒い影や赤黒い跡の正体を悟った。

仲間達が吹き飛び、死んだ跡だ。
彼らは死体すら残っていない。

——これは……

自分でも予想以上の速さで王宮に辿り着いた。

風景が一変していても、真っ直ぐ向かえたのは、彼の中にある帰巢本能でも影響したのかもしれない。

高く、綺麗な城だったのが、今や他と大差無い。

城の根元だけ残し、全て吹き飛んでいる。形らしい形など、残っていない。

住み慣れたはずの城にも関わらず、今立っている場所が、元はどういうところだったのか、さっぱり分からなかった。

「父上——！ 母上——！」

彼は大声で両親を呼んだ。何度も、何度も。

だが彼は気がついていない。もはや生きていないだろうことを。

彼は両親を探して、王宮の跡地をフラフラと歩き回る。

嫌な想像ばかりが頭に浮かぶ。

それを必死に振り払いながらも、探し回った。

日が沈むまで、ずっと。

完全に夜になったとき、彼はようやく探すことを諦めた。
竜の長はその姿すら残さず、死んだ。
大声で泣きたくなった。

——どうして、こんなことに。

彼の思いはそれで埋め尽くされ、罪悪感でいっぱいになった。
これは、彼が招いたことだった。
彼の愛した竜の国を、彼自身の手で滅ぼしてしまった。
大声で泣く。

誰もその声を聞くものはいない。
悲しげな声が響くだけだった。

空が白み始めた頃には彼はもう泣いてはいなかった。ただ瓦礫に
座って、茫然自失のような状態になっていた。

陽が昇り始めた。

ふと、太陽に反射され、何か光る物が目に入った。

自分以外の全てが滅びたこの大地に、何が残っているのかと近づ
いていった。

そして彼が死んでも不思議ではないほど時が流れ、孫すら生きて
いないだろうと思えるほど経ち、竜の国など完全に伝説となった時
代となった。

01 カルシア（前書き）

お気に入り登録や評価をしてもらえたら幸いです

01 カルシア

その森は昼だというのに、ほとんど地面まで光が届いておらず薄暗い。

時々周囲から風も無いのに木々がガサガサと揺れ、狐やウサギが飛び出し、ここが弱肉強食の世界だと周囲に教えてくれる。

風が吹くと森が揺れ、暖かな陽が差す。

自然そのもののようなこの森に一人の男が迷い込んでいた。

彼の名前はカルシア。

精悍な顔つきをしており、鋭い緋色の目は常に何かを警戒している。

すでに迷ってから七日が経っており、その精悍な顔には僅かに怒りの色が浮かんでいた。だが疲れは一切窺えない。

全身を覆うぼろきれの様なマントから、彼が非常に長い旅を続けていることが分かる。

一方で手には何も持っておらず、旅慣れているようには見えにくい。

歩くたびにマントから背中の大剣と、なぜか右腰に差した刀が見え隠れする。背中の大剣は、彼が扱えるのかと疑問になるほど、でかい。

「いっそ森を焼き払おうか……」

物騒なことをボソリと口にするが、決してしないことも自覚していた。

「馬鹿なこと言つとらんでとつと歩く」

無然とした声を出すのは、カルシアのすぐ傍を飛ぶ、人の頭ほどの大きさしかない、小さな真紅の竜。黄色の瞳は月のように、穏やかな光を持っている。名をミクリ。

何が気に入らなかったのか、カルシアはじろりと軽く睨む。

睨まれた竜はどこ吹く風と言った調子でそっぽを向いたままだ。

視線を前に戻し、とにかく森を抜けるべく、カルシアは歩き続ける。

急ぎの旅ではないとはいえ、迷っているという事実がカルシアを苛立たせる。

草木を左右に分けながら、しばらく獣道を歩き続けていく。

時々マントが枝に引っかかり、非常に歩きにくそうにしている。

段々と動物たちの声が聞こえなくなり、気温が少し下がり始めた。空を見ると木々から僅かに顔を出した空が、いつの間にか赤い。

夜が近い。

しかし夜になろうが、カルシアは休むつもりなど無い。

とにかく歩く、歩く。

突然、止まる。

「どうかしたか？」

「……人の声が聞こえた気がした」

「本当か？ それなら道を訊くのにならうだよいな」

ミクリは嬉しそうな声を出す、カルシアの表情は真剣だった。微かだが確かに人の声が聞こえた。かなり遠いようで、カルシアでなければ気がつかなかっただろう。――聞こえた声は悲鳴だった。

耳を澄まし、神経をさらに尖らせる。

喧騒が聞こえ、気配も感じた。かなり遠い。

数は四人。声からして一人の女性を、他の三人が襲っているらしい。

声の質からしたら、女性というよりは少女かもしれない。

彼ら四人がいる方向を睨み、すぐさま走り出した。その速度は道の無い森の中とは思えないほど、人間離れした速さだった。

枝がマントに引っかかるうが、もはやお構い無しだ。

カルシアの慌てた様子に、ミクリもようやく異常を察して、後ろからついていくが、たちまち大きな距離が開いてしまう。

「やめて！ 離して！」

間もなくはっきりと、女性の悲鳴が聞こえ始めた。それと共に男達の下品な笑い声も聞こえる。

遠くの方で、声の主である四人がちらりと見えた。広場になっているのか、赤い夕日が微かに差し込んでいる。

さらに速度を上げた。木々が自分のために左右に分かれたような錯覚に陥る。

たちまちに彼女らの姿が大きくなっていく。

木々が左右に流れていき、最後の一步を大きく飛ぶと、森をくりぬいた様な空間に出た。

広場と言えるほど広くは無いが、だからといって狭くもない。

そこには三人の男が、下着姿にされた少女を襲っているところだった。驚いたことに少女は獣人らしく、犬耳と尻尾をつけている。

顔が油でギトギトの男が少女に覆いかぶさり、残り二人が左右で嫌な笑みを浮かべていた。無理矢理脱がされたい服が傍に落ちている。

突然現われたカルシアに男達が一斉にこちらを向く。

一瞬、驚いた表情を浮かべたものの、すぐに気を取り直したように、左右にいた男達が招かれざる乱入者を排除しようと歩み寄る。

「ここは今取り込み中だ。お前は何も見なかった。いいな？」

痩せた男が腰の柄に手を乗せながら威圧する。

もう一人の筋肉質の男はニヤニヤと嫌らしい笑いを浮かべ、うんうんと頷く。

「……悪いが、そういう訳にもいかん」

ようやく追いついたミクリが、多少息を切らせながら、きっぱりと断る。

再びの乱入者である、ミクリを見た男達二人があからさまに固まる。未だミクリに気がついていないのは泣き叫んでいる獣人の少女と、覆いかぶさっている油顔の男だけだ。

「お前、教会の人間か！」

その叫びにも似た確認で、油顔の男もハッと顔を上げた。ありありと恐怖の色が浮かんでいる。

「ミクリ」

カルシアが相棒の名を呼ぶ。

「記録した。もう構わん」

何を、とは聞かない。そんな必要は無い。もう何度もやっている

ことだからだ。

宣告にも似たミクリの発言を聞き、二人の男が体をビクつかせる。油顔の男も怯えた表情を浮かべたところを見ると、彼にも聞こえていたようだ。

彼らの様子など知ったことではないようで、カルシアは厳格な声で告げた。

「それでは刑を執行する」

「何言って――」

顔を引きつらせた痩せた男の言葉が、途中で途切れる。

いつの間にかカルシアの左手には、黒い刀身の刀が握られており、左上に剣先を向けていた。

筋肉質の男にはカルシアが刀を抜いた瞬間が見えておらず、瞬時に立ち姿を変えてしまったことで驚き、次に、握られた怪しく黒光りする刀を見て後ずさる。

「て、てめえ！ 何のつもりだ！」

声を震わせながらも、必死に虚勢を張る。何のつもりかなど、彼も分かっているはずなのに。

彼の言葉を待っていたように、痩せた男がゆっくりと後ろに倒れていく。

止まっていた時間が動き出したように、ゆっくりと。

地面に体が触れると、鼻から上が――外れた。

たちまちに血の水溜りが徐々に広がっていく。

もう一人の男は、放心したように二つに分かれた相棒の顔を見ていた。

自失状態から立ち直り、カルシアに向き直る。

直後にヒュッという風を斬る音。

筋肉質の男は糸の切れた操り人形のように膝を折り、崩れた。すぐに血の水溜りが出来る。

カルシアの刀身は右下へと移動していた。行動の一つ一つが、常人には見ることさえかなわない。

「……もう一人はどこにいった？」

カルシアはいつの間にか消えた油顔の男を目で探す。

「ワシに気付いたとたん、その子を放って逃げおったわ。お主なら気配で読めるじやろうから無視したが」

カルシアが周囲を気で探ると、確かに男が逃げていくのが分かった。

「今から追いかけてもいいが……」

獣人の少女に目をやると、服を抱えて肩を細かく震わせている。

「放っておくわけにもいかないな……君は早く服を着るといい」

少女から目を離し、後ろを向く。少女とはいえ、いつまでも見られるのは気分が悪いだろうから。ミクリも彼に倣って顔を背ける。

背後で少女が動く気配を感じながら、刀を大きく振って血糊を落として鞘に収める。

「もう、大丈夫です……」

弱々しい声が聞こえ、少女に向き直る。

彼女はうつむき加減で立っており、手はスカートを握り締め、震

えている。

改めて見た彼女は、将来を楽しみにさせる美貌を持っていたが、先ほどの恐怖で顔が強張り、多少魅力が損なわれている。

カルシアは努めて優しく聞こえるように尋ねる。

「君の名前は？ 俺はカルシアでこっちの竜はミクリ」

「……リーラ」

「リーラか、いい名前だ。犬の獣人かな？」

「……狼です」

ぽつりと訂正する。

「そうか、それは悪かった。それでリーラは、こんな森で一体何をしていたんだ？」

とたんにリーラの顔がハツとなって顔を上げるが、すぐに俯き、黙り込む。

カルシアはそこに深い悲しみを読み取っていた。
急かしたりせずに話し出すのを辛抱強く待つ。
やがてポツリとリーラが訊いた。

「……村を……」

「ん？」

何か言ったらしいが、声が小さく聞こえなかった。

「村を助けて下さい……」

小さく悲壮な声。どうにもならないが諦めたくない。そんな思いが籠っているようだった。

少女の二つの瞳には涙が溜まっていた。

02 リーラ

「どういうことだ」

カルシアは疑問を投げかけたが、とうとう泣き出してしまった。小さな泣き声が、静かな森に響く。

「リーラ、泣いとらんで事情を説明せんか」

困り顔のカルシアに代わって、ミクリが厳しい声を出す。この調子では話しがなかなか進まないの、ミクリの声が厳しくなるのは仕方が無い。

細かい事情は分からないが、リーラが襲われていたことから、その村に良くないことが起こっているのは間違いないだろうから。自然とカルシアとミクリの気が急ぐ。

しばらくして泣き止み、まだ鼻をぐずぐず言わせていたものの、ようやく落ち着き始めたリーラが、ポツポツと事情を話し始めた。

「……私たちの村はこの森を抜けて、すぐのところにあります。平和な村でした。いつも皆がのんびりしてて、時には助け合って……でも最近になって、近くの廃墟に盗賊が住みついたんです……その盗賊たちは、ことあるごとに私たちの村に、お酒や食べ物要求をしてくれました。この一ヶ月ほどはずっと……ですけど、とうとう耐え切れなくなって、有志の討伐隊を結成したんです……」

リーラがまた泣きそうな表情を浮かべたので、カルシアは少し焦ったものの、泣くことなく続けていく。
意外にもしっかりした声だった。

「……全員殺されました」

「分かった。もういい」

沈痛な表情で話すリーラを遮る。

——ようは報復されたということか。

しかもこんな少女が、一人で森の中に逃げなければならぬほど切迫した状況になっている。

彼女の服は逃げている時に引っ掛けたのか、所々穴が開き、血が滲んでいる。

必死に逃げたのだろう。

——両親はどうしたのだろうか……

最悪の想像が頭を過ぎるが、それをリーラに聞かせるのは酷だろう。

「道案内、頼めるか？」

カルシアが訊くとリーラは素直に頷いた。

気を広げても、あの逃げた男以外に誰も見つからず、村はかなり遠いらしい。にも関わらず、躊躇せずうなずいたのは、この辺りも遊び場なのだろう。

先に歩き出したリーラの後ろに続いていく。

「もしかして獣人の村なのか？」

すぐ目の前を揺れる尻尾を見ながら訊く。小麦色の綺麗な毛並み。髪の毛も同じ色をしていた。

時々赤い夕日が当たって、綺麗に輝いた。

「私は養子なので……」

「そうか。いい人たちなんだな」

あえて過去形にしない。

「はい、とても」

「……少し急ごうか」

「……はい」

すでに段々と歩く速度が速くなっていたが、さらに速度を上げていく。今にも走り出しそうなほどに。

——大切な人たちなんだな。

だが村の現状を考えると心が重い。出来れば助けたいとは思いますが、間に合うかどうか。

——間に合わないだろうと思う。

未だに気を広げて周辺を探っているが、まだ人の気配がしないのだ。

カルシアは死んだ人間の気配は探れない。

単に村がまだ遠いということだろうが、嫌な予感を拭う理由として足りなかった。

報復ならば、二人か三人程度を見せしめに殺せば十分はず。

だがこの少女が、一人で逃げているという状況が予断を許さない。

「カルシアさんは強いんですか？」

リーラが突然訊いてきた。

カルシアが何か答えるより先にミクリが口を出した。

「強いぞ、この男は。おそらくこの大陸の誰よりも」

自信満々に断言する。もしミクリが人の姿をしていたなら、胸を張って答えていただろう。

何が気になったのか、リーラが肩越しに顔だけちらりと振り向かせ、すぐにまた前を見る。

「初めて見ましたけど……竜って喋れるんですね」

前を向いているため表情は分からないが、かなり驚いているようだ。襲われていたときは自分のことで一杯だったのだろう。あれからミクリは喋っていない。

対してミクリは憤然としている。

「人が喋れて、竜が喋れないとは思われとうないの」

「ご、ごめんなさい!」

根が素直なのか、すぐに謝った。

……素直というよりも、竜が怒ったので怖かったのかもしれない。

「分かれば良い」

ミクリが機嫌よく答える。今の状況が分かっているのだろうか。

——こんな状況だからこそ、か。

ミクリなりの心遣いなのだろう。

「ミクリ……さんも強いんでしょうか？」

「ミクリでよい。……自慢ではないが、ワシは弱いぞ。それこそお主にすら勝てぬほどにな」

自信満々に言うが、本当に自慢にならない。

「それじゃもしかして、戦えるのはカルシアさんだけですか？」

足を止め、振り返る。その顔には不安がありありと浮かんでいた。

「そうなるな。何しろ戦いとなると、ワシは足手まとい——」

「それじゃ駄目です！」

突然大きな声を張り上げ、ミクリの体がビクツと震える。

夕日までもが、彼女の声に驚いたように、雄大なその姿を完全に隠したようで、とたんに森の暗さが増す。

カルシアもどういふことかと、怪訝そうな目をリーラに向ける。

「私が頼んだことで申し訳ないんですけど、それじゃ駄目です……」

リーラ自身、自分の出した声の大きさに驚いたようだったが、構わずに続ける。

「相手は三十人以上いるんです。一人でなんて無謀です」

どうやらリーラはカルシアの腕を見込んだというより、竜の力を頼っていたらしい。

竜はどの地方であろうと、力の象徴に他ならず、小さくても強いと思い込んでいたのだろう。

カルシアは内心、「無礼な」と思いながらも笑顔を作る。だがなぜかりーラの体がびくつと震えた。

「大丈夫。ミクリも言ってただろ、俺は強いんだ」

「でも……」

「いいから。先を急ごう」

結局不安な表情は消えなかったものの、再びりーラは歩き出した。歩みは先ほどまでより遅い。

「心配せんでもよい。キリエミラ教会の死神だぞ？ 実力は折り紙つきだ」

「……教会？ 死神？」

ミクリが慰めるように言ったが、りーラには分からなかったようで、小首を傾げている。

「なんじゃ、知らんのか？ 今時珍しいの」

ミクリが呆れた声を出す。

「……ごめんなさい」

カルシアの顔を窺いながら、不安そうに言う。

「別に謝る必要は無いがの」

ちらりとカルシアに視線を送る。

説明しろ、という事らしい。「お前がしろよ」と内心思ったものの、ミクリよりは当事者である自分の方がいいかと、考え直した。

「教会は言わば、正義の武装集団だ。その中でも死神と呼ばれるのは精鋭だな。死神は小さな竜を連れているから、大抵すぐ分かる」
「そんなのがあるんですか。知りませんでした。それでカルシアさんはミクリを連れてるんですね？」

尻尾に引っかかった枝を払いながら言う。歩くたびに引っかかって、歩きにくそうにしていた。

「ああ。……三十人程度は問題にならないから、そのことで気にすることは無い」

一応言い加えておく。

リーラは頷いたものの、本当には理解していないというのが、嫌でも伝わる。

三十人が問題にならない武力と言われても、ピンと来ないのは当然である。

「まだしばらくかかるのか？」

「はい」

随分と遠くまで逃げてきたらしい。

「なら死神について少しでも話してやろう。どうやらリーラは俺の力を疑ってるようだしな」

「そんなことは――」

「いや、いい。見てれば分かる」

否定しようとしたリーラを遮り、続ける。

「知らないなら仕方無いしな。キリエミラ教会というのは、人を殺すことによって世界に平和をもたらそうという宗教、というよりは集団と言った方がいいかもしれない」

「……そんなことが出来るとは思えません。殺人で平和なんて……」

教会の人間を前にして平気で口にする。

おかげでミクリの反感を買った。

「そんなもの、やってみなければ分かんたろう？」

「ミクリ、お前はいいから。この子の言いたい事も分かる」

「何じゃ、お主まで。ワシだけのけ者か？」

拗ねたような口調にカルシアは苦笑を浮かべる。

——やはりまだ子供だ。

「いいから。今はそういう話しじゃない」

「ふん」

ミクリは拗ねてそっぽを向いてしまった。

あとでブドウ酒でも奢れば機嫌を直すので、ミクリは放っておいて話を続ける。

「実際のところ、殺人を実行していくのは簡単な話しじゃない。何故か分かるか？」

リーラは少し考えて、

「国によって法律があるから？」

「そう。そしてそれを解消するには、基本的に二通りしかない。国

を教会に取り入れるか、国にも簡単に口が出せないような力を手にするか。教会は後者を選んだ」

「国よりも強い力を手に入れたんですか？」

本当に驚いたようで、振り向きながら口早に訊く。表情は暗いが、黒い瞳が妖しく輝いていた。

カルシアは瞳の中の何かが気になったものの、続ける。

「教会のトップ、教皇様がそういう力を手に入れたんだ。その力は他人に力を与える力、死神は皆、力を分け与えられてる。俺の知り合いには炎を手から出す奴もいるし、人を一瞬で凍らせる奴もいる」
「それが国に口を挟ませない力……」

「そういうことだ。だから安心していい。俺がどういう力を持っているかを、教えることはできないが、三十人程度は問題じゃない」
「教えることができない？」

「正確には、したくない、だな。重要なことだから」

「そう、ですか」

「……大丈夫、安心していい」

「はい……」

再び前を向いたため、リーラの表情は見えない。この話を信じたのか、はたまた信じていないのか。

だがどうでもいいことだ。この話は真実なのだから。

03 村と父親

カルシアが教会について話し終え、その後は会話もなく黙々と歩いていく。

しばらくすると他の人間の気を感じた。
数はかなり少ない。が、盗賊たちの人数よりは多い。

「人が居るな」

「何人？」

「四十人ほどだ」

すぐさま反応したミクリに答える。拗ねていたくせに反応が早い。

「村の皆かもしれない……」

リーラが祈るような声音を出す。カルシアがどうやって人数を把握したかなど、思慮にも入っていないらしい。

「さてどうだろうな。村人と盗賊という可能性もある。先に村の外から様子を見るべきだろうな。村人というのはどれぐらいの人数だった？」

「皆と盗賊……」

リーラは絶句して、カルシアの質問は聞こえていないようだった。それはそうだろう。この二つが一緒になって、いい想像をしろという方が無茶だ。

それでも彼女は、元気の無い尻尾を揺らしながら前に進む。

「村にはどれぐらいの人がいた？」

再び同じ質問。

「……え？ あ、そうですね。大体二百人くらいだと思います」

リーラの話しが本当なら絶句するのも頷ける。160人ほどが死んだ計算になる。

「……もう場所は分かる。リーラは待っていてもいいぞ？」

「そうした方がいい。お主の見たくないものもあるろう」

村人の死体。もしかしたらリーラの両親の死体もあるかもしれない。
い。

だが彼女は気丈にも首を横に振った。

「いえ、私も行きます」

こちらを振り向き、しっかりした口調で言うが、リーラの顔色が悪い。

今にも倒れるのではないかと半ば本気で心配になる。

「そうか」

もはや引き止めることはしない。ここで待たせたとこで確かに意味は無い。事実が変わるわけでもなく、不安を引きずるだけにしかならないからだ。

残りの距離を黙って歩いていく。

陽はいつの間にか暮れており、森には闇の帳が下りている。

生物の気配も消え、皆自分の家で休んでいるのだらう。

リーラは外から来た盗賊に村を目茶苦茶にされ、自分の居所を奪

われた。もしかしたらこの子の親も殺されたかもしれない。

理不尽。

何故そんな理不尽が許されるのか。

いや、別に許されているわけじゃない。抵抗できないだけだ。したくてもできない。……それは苦しいだろう。

ただ彼女達は平穏に生きていただけだ。戦うことも無く、争うことも無く。

いつしかカルシアの中に怒りが渦巻いていた。「常に冷静沈着に」という彼の信条をあざ笑うような怒りだった。

だがそれを抑える。

怒りを無くすのでなく、怒りを冷静という名の仮面で隠すように、ゆっくりと抑えていく。

——怒りに飲まれてはろくなことにならない。

彼は身に染みて、知っていた。

「あそこです」

リーラの声で村がもう目の前なのに気がついた。かなりの怒りに駆られていたらしい。

すぐさまじっと村を見る。

「リーラとミクリは少し待ってろ、様子を見てくる」

二人の返事を待たずに行動へと移した。

森を抜け、すばやく村に近づいていく。一步近づくとたびに血の匂いが鼻について、カルシアは思わず顔を顰める。

村の側面から近づく。さすがに様子見で正面から近づいていく気は無い。

一軒の家に近づき、その家の裏から村の様子を見た。

ここまで来ると相当な血の匂いがして、鼻が麻痺しそうだ。

村は悲しみに包まれていた。

ついこの間まではのどかない村だったのだろう。一軒一軒が古いものの、人の生活感が漂っている。

近くの森も猛獣などおらず、申し訳程度の村を囲む柵を見ても、天敵がいなかったのが窺えた。

今は荒らされてしまっているが、村の外には大きな畑も作られていて、村で協力して暮らしていたらしい。

少し遠くには川も見えた。村の位置を考えると近すぎるぐらいだが、氾濫もせず穏やかなのだろう。

普段は子供の笑い声の聞こえる、平和な村だったはずだ。

それが今、悲しみて満ちている。

女性のすすり泣く声、子供の泣き声、時々聞こえる男達の怒声。そして何かを引きずる音。

近くに人の気配が無いことを確認して、さらに近づいていく。

女子供は身を寄せ合って悲しみにくれていた。

その横を死体を抱えた男達が通っていく。何人かは持ち上げることも出来ず、泣きながら引きずっていた。

広場のような広い空間には、老若男女問わず、いくつもの死体が並べられていた。

ほとんどの死体は切り刻まれていた。

女性の死体で服の乱れが一切無いのは整えたからだろう。こういう事件で強姦は普通のことだから。

「このまま泣き寝入りするつもりかよ！」

突然男の怒声が聞こえた。死体を集めていた一人らしく、広場にいたもう一人の初老の男に怒鳴っている。

「そんなこと言っても仕方ないだろう。……俺たちまで殺される」
「だからってこんな、こんな目にあって……」

最初に怒鳴った若い男の語尾が弱々しく消えて、泣き声に変わった。

これは――怒声というよりも子供が泣き喚いているのに近い。
自分ではどうしようもないことが分かっているのに、言わずにはいられないのか。

「だからってあんな条件のめるかよ……」

弱々しいがはっきりと拒絶を示す。盗賊達が何か要求してきたらしい。

それで、これだけの人数が生き残っているのかもしれないと納得した。

「のまないと私たちまで殺される」

若い男に初老の男が顔を歪めて反論する。彼にしても苦渋の決断なのだろう。

若い男も黙ってしまった。お互いに無理を言っているのは十分分かっているのだろう。

とうとう若い男も黙って涙を流し始めてしまった。

カルシアは要求とやらが知りたかったが、これ以上聞いていても喋りそうに無い。口にすることを嫌悪しているようにも見える。

とりあえず一番の目的である盗賊の有無は確認したため、カルシアはそっと二人の所に戻る。

リーナ達の所へ歩みを進みながらも気分は重い。

思っていたよりも多くが生きていたものの、かなりの人数が死んでいることに変わりはない。

——だからといって嘘を言う訳にもいかないだろう。

リーナにどう伝えようか考えながら、急ぎ二人の下に戻っていく。

どう話すかあれこれと考えながらも、すぐに二人が視界に入る場所まで来た。

向こうも気付いたらしく、身を潜めていた森から抜け出てやってくる。

「どうでした？」

不安顔でリーラが訊く。ミクリも表情は分かりにくいが不安そうだ。

カルシアは慎重に言葉を選びながら、

「村の状況はあまりよくない。だが四十人ほどは無事なようだ」

「四十人……それだけでも助かってくれたことを、喜ぶべきなんでしょうね……」

リーラは目を閉じて沈痛な表情を見せる。

四十人も生き残っていたのか、四十人しか生き残れなかったのか。どちらにしても多くが死んだことには変わりが無い。

「村に何か要求もされたらしいな。詳しいことは分からなかったが、村人にとって辛いものらしい」

「要求ですか」

「何か要求されるような心当たりは？」

「いえ、そんなものは。私たちの村は特産品とかありませんでしたし、畑を作って細々と生活していたくらいですから。あいつらが何で村に来たのかも、分からないくらいです」

「それなら直接訊くしかないようじゃな」

ミクリに頷き、リーラの目を真っ直ぐに見る。

「村で辛いものを見ると思う。覚悟はいいな？」

カルシアの質問に、リーラはゆっくりと頷いた。

「……分かった」

再び村へと歩き出したカルシアの後ろを、リーラとミクリが続いていく。

リーラは哀しげな表情を浮かべているが、これから直面するものを冷静に受け止めようとしていた。

今度は村の側面に回ることなどせず、正面へと向かう。

村に近づくたびにリーラの体が強張るのを、背中ではしひしと感じる。

村に入ると真っ直ぐに先ほどの広場へと向かう。

何人かは明らかに怯えた目を向け、中には何とも言えない嫌な目を向けるものもあった。

だが総じて声をかけてこないことは共通していた。

「……妙だな」

「妙とは？」

思わず口にしてしまったそれを、ミクリが聞きとがめる。リーラには聞こえていないようだった。これから見るものに思考が行っているのだろう。

リーラに聞こえないよう、少しだけ距離をとってからミクリに答える。

「怯えた目を向けられるのは分かる。俺たちは部外者だからな。盗賊の仲間かもしれないと怯えて当然だ」

「ふむ、確かにな。竜まで連れて怪しさ満点じゃからの」

あえてミクリは暢気な声を出す、カルシアの緊張がほぐれることは無かった。

「中には嫌悪の目を向けるものまでいる。そこまでは理解できる。だが誰一人リーラに声をかけないのは何故だ？ 彼女は部外者じゃない。しかも目立つ獣人だ、村人全員が知っていてもおかしくない」

「……確かにの」

ミクリは同意し、考え込んでしまった。

カルシアも考え込む。

村に入ってから何人ともすれ違っているが、誰もリーラに話しかけない。彼女はまだ子供だ。せめて声をかけるぐらいは普通するのではないだろうか。

どうにもリーラから聞いた村の印象とずれが生じている。

印象のずれ。つまりは違和感。

カルシアは直感として、村人の態度を嫌なものとして理解しているが、原因がさっぱりわからない。自分とミクリが居るからだろうかとも考えたが、それでもやはりおかしいだろう。

結局何か分からないまま、広場へと到着した。

綺麗に死体が並べられているのを前にして、リーラは立ちすくんだ。

「――っ」

リーラが息を呑み顔を歪める。当然だ。ここに並べられているのは皆知り合いだろうから。

泣きたいのか、叫びたいのか。

リーラは何ともいえない、苦しそうな表情を浮かべていた。やがてふらふらと死体の間を歩いていく。一人一人の顔を確認しながら。

その様子を見て、ふと疑問に思った。
死体が明らかに少ない。

「あんた、何者だ？」

突然背後から声を掛けられ、振り向くと男ばかり十人ほどが集まっていた。

全員よぼよぼだったり、痩せていたり、幼かったりで、とても戦闘に向きそうではない。

「ただの旅人だ」

「ふうん……」

答えるのは先ほど来た時に怒声を発していた若者だった。正面から見ると、悪餓鬼という感じで、気の強そうな若者だった。リーラより少し年上だろうか。

「リーラちゃんと一緒に居たな？」

「ああ。それがどうかしたか？」

訊くと、一瞬だけ視線を泳がせ、すぐにこちらを見る。

「……あんた、あの子を連れて逃げてくれ」

「おい、何を言ってやがる！」

若者の言葉に反応したのは、まして先ほどの初老の男だった。慌てて若者の肩に手を置き、無理矢理振り向かせる。そのまま引きずる様にしてカルシアから離れ、彼らを囲むように話し込み始めた。

カルシアとミクリは顔を見合わせる。どうも様子がおかしい。

「逃げろと言われたの」

「だな」

「逃げるのか？」

「……それを聞くのか？」

ミクリが肩をすくめるような動作をする。

再び若者達の話し合いの方へと目をやった。

この距離程度なら、十分盗み聞きはできる。

彼らの会話を聞くべく、耳をすませようとしたら、リーラが青い顔をして戻ってきた。この時、確かに初老の男に困惑の色が浮かんだのを、カルシアは見逃さなかった。

「お母さんが……」

リーラがそこで押し黙る。

「そうか……」

分かっていたことだ。だからといって悲しくないはずが無い。カルシアもミクリもかける言葉を失ってしまった。予め考えていたはずなのに。

ただリーラの頭に手を置いてやり、軽く抱きしめる。

すると彼女は声をあげずに泣いた。

ようやく落ち着きを取り戻し、カルシアから離れた時、

「リーラ……」

と初老の男が前に出て、リーラの名を呼ぶ。リーラに気を取られているうちに話し会いは終わったらしく、若者も開放されていた。思わず舌打ちしそうになる。

「お父さん……」

リーラが目を見開いて眩き、彼に近づいていく。最初の数歩は歩き、すぐに走り出し、男の胸に飛び込んでいった。

二人が抱きしめあった時には、少女は大きな声をあげ、泣いていた。

「奴が父親じゃったらしいの……」

ミクリが眩く。

普通なら親子の再会と別れを思っただけで涙ぐむところなのだろう。だがカルシアはそういう気分にはなれなかった。

——先ほど見せたあの男の困ったような表情は一体……

こんな再会なら泣くか、喜ぶか。他にはこれに準じる表情を取るなら分かるが、困惑とはどういうことだろうか。

先ほどの印象のずれと相まって、余計に嫌な予感が募る。

それに今の父親の表情。

リーラからは見えていないだろうが、見ている痛々しい表情をしている。――リーラが生きていたことで彼は救われていない。

04 ニグアル邸

カルシアは訝しく思っていたが、親子の再会に口を挟むような真似はしない。しかし警戒は怠らない。

しばらく泣いていたリーラを抱きしめていた男だったが、やがて彼女を体から離し、こちらへと歩を進めた。

彼の後をリーラが静々と続き、さらにその後ろを先ほどの男達が硬い表情で続く。

「初めまして。リーラの父のニグアルという。一応この村の村長をしております」

ニグアルが軽く頭を下げる。

村長ということだが、言われてみれば確かに厳格そうで、同時に穏やかな雰囲気纏っており、平時ならさぞ頼もしいだろう。

だが先ほどの口論を目撃したカルシアとしてはどうも頼りなく思えて仕方が無い。それに先ほどから、まるで警戒するように大剣と刀へと視線をやってくる。

まあこんな時なので仕方無いことだろうが、こっちとしては気になる。

「俺はカルシア。こっちはミクリ。森で迷っていたところ、彼女と出会った」

リーラが襲われていたというのは言う必要もないことだ。彼女としてもあまり触れられたくないだろう。

「そうでしたか……それは本当にありがとうございました。村がこんな状態でなければ、もてなしたいところですが、あいにくそんな

余裕ありませんでな」

「リーラから聞いた。かなりの人が殺されたみたいだな」

「ええ。数えたところ168人にも及びました。それも討伐隊が全滅したものとした上で、分かっているだけ、ということですが。中には森に入っただけのまま殺されたり、連れて行かれたりしる者もおるの
で……」

居た堪れないといった様子で首を振る。

予想よりもかなり多くが犠牲になっているようだった。もしかしたら、ざっと180は死んだのかもしれない。

「随分と多いらしいの」

ミクリが悲しげな声を出すと、ニグアルがぽかんと口を開けて小さな竜を見る。どうやらリーラと同じく喋れるとは思っていなかったらしい。彼の後ろに控えている村人も似たような反応を示した。

「この村には無礼な者が多いの」

彼らの反応を見て無然とした声を出す。

「いや、申し訳ない。何しろ竜を初めて見たもので……」

まさか喋れるとは思わなかった。

そう言いたいらしい。実際のところ、この大きさの竜が喋れるのは珍しいのだが。

「構わない」

ミクリに代わってカルシアが答える。抗議の目を向けてきたが、

気付かない振りをして先を続ける。

「それよりも盗賊達というのは今どこに？ 姿が見えないようだが」
「奴らなら住処に戻っていきましたよ。おかげで何とかこれだけ生き残れた」

「……これほど殺しておいて、引き揚げたと？」
「ええ、一体何がしたかったのやら……」

ニグアルの目が泳ぐ。嘘のつけない性格をしているようだ。
彼は何かを隠している。
そう確信した。

——何を隠しているのか知らないが、この男を信用しない方がよさそうだ。

カルシアの思考など、うかがい知ることの出来ないニグアルは、
思わぬ提案をしてきた。

「ところでカルシアさんはこの後どうするおつもりかな？ ……もう日が暮れて空が暗い。こんな時だが、是非お礼がしたいので一晩泊まっていかれんだろうか」
「そうだな……」

正直言って、遠慮したかった。
この村は血の匂いが強すぎる。

「もちろん無理にとは言いませんし、もはや村よりも森の方が安全かもしれません。それでもせめて、この子を助けてくれたお礼がしたい」

ニグアルは横に控えているリーラの頭に手を置き、優しくな目を向けた。

感謝しているというその言葉は信じてもいいのかもしれない。だがどうにも油断ができない。

素直にうなずかせない何かを、この男は持っている。

「……どうでしょうか？」

黙りこんだカルシアに、不安げに再度訊く。

「別に構わんじやろ。それにワシは布団で寝たい」

ミクリが余計な口を挟む。

結果的にそれでカルシアの腹は決まった。

「……そうだな。世話になることにしようか」

「そうですか。来られるか」

ほっとしたように息をつく。その後ろの男達もあからさまに安心したような表情を見せた。

早計だったとは思わない。彼らが何か企んでいたとしてもカルシアにとっては問題ないからだ。

「それではまだ早いですが、こちらの方へ」

片手を広場とは反対の方向へ広げる。ちょうど男達の真ん中を通ることになり、彼らがさっと左右に分かれて道を譲る。

ニグアルが先に歩きだしたので、その後ろに続いていく

男達の何ともいえない視線を受けながら、彼らの間を通る。

彼らの表情は様々だったが、その中でもあの若者が気になった。

悔しそうな目。

拳を握り、細かく震えている。

逃げろと言ったことといい、何が迫っているのか。

——どうでもいいことだ。彼らに自分を傷つけることなど出来ないのだから。

黙々と歩いていき、ニグアルが一軒の家の角を曲がり、彼らの視線が外れたところで、目の前の様子に意識が飛んだ。

カルシアは思わず眉根を寄せる。リーラも気分が悪くなったのか、ニグアルの横に並び、腕を抱くようにしてくっつく。

先ほどまでの道は村の正面から続く道で、綺麗にされていた。生き残った者たちで片付けていたのだろう。

だが目の前のこの場所は酷いありさまだった。

未だ片付けられていない死体が三つ、無造作に転がっている。

中には腕が半分ちぎれ、骨が見えているものもあり、見るものによつては悪心が募る。

放置されている彼らに共通するものは、皆がありありと恐怖の表情を浮かべていることだ。

何故こんな目に遭うのか。

物言わぬ目が、そう問いかけているように見えてならない。

死んだ彼らの間を通り抜けていく。

視界の端で、血がべったりと壁についているのが見えた。

暗くてほとんど分らないが、血のついた手で触れ、そのままずるずると下につづいているようだ。

まだ完全に乾いていない血溜まりもあるが、死体は片付けられたのか、そこには無い。

さっきまでの道にも、同じような生々しい跡があったのかもしれないが、この暗さで気がつかなかった。

できれば気がつきたくなかったが。

嫌なものを見た。

ちらりと隣に視線を移すと、ミクリの表情もどこことなく暗い気がした。

ニグアルはもはや見慣れてしまったのか、後ろから見る限り動揺を見せない。

「あれかの？ ニグアルの家は」

ミクリが目を細める。

放置された死体の間を抜けて、さほど遠くないところに一際大きな木造りの家があった。

とは言うものの、他の家と比べてというだけで、とりわけ豪奢というようなものでもない。

近づくにつれ、段々と大きくなるその家は、村の端にポツンと忘れられたように、佇んでいた。

家のすぐ後ろに村を囲む柵があり、村の端っこだと示している。

「ここが私たちの家です。どうぞ」

玄関を開けて脇に立ち、カルシア達を促す。

カルシアとミクリはちらりと顔を見合わせ、家の中に入っていく。続いてリーラとニグアルが入ると、ボタンという玄関を閉める音が響いた。

家の中はあまり家具はなく、盗賊が来たとは思えないほど綺麗にされていた。いや、本当にここには来なかったのかもしれない。

外の悲しみに暮れた人々とは無縁の空間だった。

家の真ん中には木造りの机と、丸太を切ったような小さな椅子が置かれている。

他には二階へ続く階段があり、玄関以外に扉が一つある。キッチンが別になっているようで、見た感じ、扉の無い狭そうな部屋が、

キッチンになっているようだ。

そちらから美味しそうな、いい匂いが漂ってくる。すでに食事の準備していたらしい。

……同時に全く別の匂い。よく知っている二つの匂い。

血の匂いでごまかされそうだったが、経験で二つの匂いをしっかりと嗅ぎ取ることができた。

——一つは分かるが、もう一つは？

カルシアがいぶかしんでいる間に、ニグアルは真っ直ぐキッチンの方へと向かい、姿を隠してしまった。後ろを、リーラが続いていく。

奥で小さな話し声が聞こえる。

少し小さい声だが、カルシアには問題無く聞こえる。

「クオルさん、料理はできとるか？」

「お帰りなさいませ。もう少々、お待ち下さい」

「分かった」

お手伝いさんがいるようで、声からすると女性。彼女が準備を整えていたらしい。とはいえ、家に入る前から気配で分かっていたことではある。

「クオルさん、ただいま……」

「お帰りなさいませ、お嬢様。……よく、ご無事で……」

「私は助けてもらったから……でも、お母さん……死んじゃった……」

涙声になっている。姿が見えなくとも、泣いているのが分かる。

「……きつと奥様はお嬢様が生きていてくれて、ご満足でしょう」

その後も二人のやりとりは続いていたが、ニグアルは戻ってきた。

「申し訳ないが、もう少しかかるらしい。先に客室へ案内しましょう」

「ああ」

ニグアルの提案に頷くと、「それではこちらへ」と二階へ案内しようとしてくれたが、階段へ辿り着く前に、足を止め、玄関へ振り返る。

「どうかされましたかな？」

ニグアルが怪訝そうに訊くが、カルシアは答えずに目を細めただけだ。

ようやく行動を起こした時、カルシアは玄関の方向へと向かっていった。

「どうやら俺に用事らしい」

一言だけ言って。

ニグアルは仕方なしに、カルシアの後をついていく。ミクリは当然のようにカルシアの横を飛んでついていった。

玄関を開けると、あの十人ばかりの集団がこちらへとやってくる場所だった。

全員が思い思いの武器を持っているが、お世辞にも武器とは呼べず、鎌やら鍬やらの畑用具である。

カルシアは彼らの気配を感じたのだ。

彼らの殺気立った気配を。

カルシアが姿を現したことで、彼らもピタッと近づくのをやめた。ざっと見た限り、あの若者の姿だけは無い。

「ニグアルに用か？ それとも俺か？」

カルシアが詰問する。

男達は顔を見合わせる。

一人が前に進み出た。白髪の男。ニグアルとよく似ているが、彼の方が少し年齢がいつているように見える。

彼が口を開く。

「ニグアルに用だったが、あんたへの用でもある」

「ほう？」

「こちらの都合で悪いが、大人しくしてもらう」

白髪の男が言うと、男達が一斉に構えた。

カルシアを中心に半円を作るようにして取り囲む。

驚いたのはニグアルだ。

「馬鹿な！ 何をやっておる！ 私に任せる約束だったはずだ！」

「あんたは信用できない。理由を言う必要があるか？」

ニグアルが押し黙る。

彼の方を見ると目があったが、すぐに視線を外された。

どうやら後ろ暗いことがあるらしい。ニグアルと村人の間には信頼関係は無いようだった。

「どうということかの」

ミクリが不思議そうな声をあげる。

よく分からないのはカルシアも同様だったが、一つはつきりしていることがある。彼らは害意をもっているということだ。

この時点で彼らを全て殺すことが、カルシアの中で決定した。

相手が盗賊だろうが村人だろうがカルシアにとっては差が無い。

例え、突然の不幸で心が病んでいたとしても。

だが問題がないわけではない。ここで殺してニグアルの心象を悪くするというのは、あまり利口な考えとは思えない。

——あとで殺せばいいか。

カルシアの思考は冷徹だった。

——それにしても……

カルシアは大きくため息をついた。

頭を一度振ってから、彼らに向き直る。男達の目は殺気立っている。

「お前達ごときでは、俺に触れることもできない」

——嘗められたものだ。何の訓練も受けていない、たかが村人如きが、俺を傷つけられるとも思っているのだろうか。

怪我しないうちに引けという意味で言ったのだが、男達はますます殺気立つばかりだった。

「すまんが、俺たちのために捕まってくれ」

白髪の男だけが申し訳無さそうにしている。武器は構えていたが。男達がすり足でもするように、ゆっくりと囲みを小さくしていく。

カルシアは再び大きなため息が自然と出た。

「嘗められたものだ……」

今度は口に出して言った。おもむろに拳を握ったまま片手を上げる。

男達がぴたりと止まった。何のつもりか、というふうにはカルシアを見ている。

拳をゆつくりと開けていく。同時に男達が宙に浮いた。

男達は空中でじたばたもがいているが、どうしようもない。ニグアルもまた目を見開いて驚いていた。

「じゃあな」

そう高さは無いものの浮き上がった男達は突然、一気にそれぞれの方角へ勢いよく飛んでいった。

家の壁に当たった者もいるが、ずっと遠くまで飛ばされた者もいた。酷い者は森の中へ飛ばされていく。どこかで木にぶつかるのが容易に想像できる。

「さて、休ませて貰おうか」

ニグアルに振り返って言った。

声を掛けられたニグアルはハッとして、

「あんた、魔術師だったのか……」

と小さな声で言った。

魔術師。魔法を操る者。今の時代では、ほとんど扱えるものがおらず、古の術として認知されている技能。

「部屋に案内してもらえるか？」

ニグアルはゆっくり頷き、再び家の中へと戻った。

05 ニグアルの頼み

用意してもらった客間でカルシアとミクリは一息つく。

湯浴みのための桶を持ってきてもらい、二人は体を洗い終えていた。

久しぶりに体を洗い、実にすっきりとした様子だ。体中埃まみれだったのが、髪にはつやが戻り、すっかり綺麗になっている。

だがカルシアには休んでいるという様子は無く、大剣と刀を差してボロボロのマントもまた着ていた。

呼ばれるまでの間、カルシアはミクリと喋りながら待っていた。

話しの内容は主に村長、というよりもこの村が受けた要求についてで、恐らくそのためにニグアルは悩んでいる。

先ほどの村人の行動も、その延長なのは彼らの発言からも予想がつく。

何を悩んでいるのかは具体的には分からない。

今もニグアルは何か指示しているようで、外に出て行った音が聞こえていた。

どうやらニグアルにも先ほどのことは計算違いだったようで、問い詰めに行ったのかもしれない。

一つ確かなことがある。

「もし敵意をもってきたら……」

——殺すつもりだ。

最後まで言わなくてもミクリには伝わり、ゆっくりと頷いた。全く持って物騒な会話を交わす二人である。

しばらくするとリーラが呼びに来た。枝でボロボロになった可愛い服から、動きやすい男装のような格好に変わっている。

襲撃された時、逃げやすい様にだろう。

よほど前の服は逃げにくかったらしい。

リーラに案内されていくと、テーブルの上にはすでに食事の準備が整っていて、主人であるニグアルが待っていた。

座るように促され、カルシアが腰掛けると、隣にミクリが机の上にちょこんと降り立つ。

目の前にニグアル、ミクリの前にリーラが座った。
最初にニグアルが口を開いた。

「改めて礼を言わせて貰う。カルシアさん、娘を助けていただき、本当にありがとう」

ニグアルとリーラが頭を下げる。

「ささやかですが、どうぞご賞味下さい」

そうして晚餐が始まった。

シチューを中心とした簡単な料理だったが、クオールの腕がいいように、かなりうまい。

何よりも用意された赤ワインが合っていて、食が進む。

ミクリも口に合ったようで、顔を汚しながら、ガツガツと口を突っ込んで食べている。

ニグアルに頼み、ミクリにもワインを頼む。ブドウ酒はあいにくなかったようだ。だがミクリには酒の種類などほとんど問題ではない。機嫌などたちどころに直る。……とくに直っていたが。

食事中は主にカルシアが喋っていた。仕方無しに。

村がこんな状態でニグアルやリーラに喋らせるのは、酷だろうか

ら。

ミクリはとても喋れる状態じゃない。

「北のホイルドという民族は狼と暮らしていてな。食べるのも眠るのも一緒に生活していた。だが一番は狩りだな。狼を使って狩りをするんだ。何匹かの狼をうまく操って獲物を追い込み、狩人が止めを刺す。ホイルドは狩りの名手だな」

他愛のない話した。

カルシアは自分でポツポツとした喋りをすると思っており、非常に聞き取りにくいとも思っている。

だが目の前の二人、特にリーラはしきりに耳を傾け、興味深そうに聞いていた。

ニグアルも興味深そうなのだが、表情は多少暗い。

……食事が進むごとに表情が暗くなっている気がする。

食事が終わり、食器が下げられた頃には、リーラは現状など忘れたように、話しの続きを聞きたがっていた。

「……カルシアさん。頼みがあるのですが、聞いてもらっても良いかな？」

ニグアルが硬い表情で、話をせがむリーラを遮るように、決然とした口調で言った。

——来たな。

内心の思いなど顔には出さない。内容も想像がつく。

「マクル草もムロウスの種も使わなかったようだから、聞いても構わない」

とたんにニグアルの顔が強張った。

「どうしてそれを……」

「カルシアは鼻が効くからの」

クオルがおっかなびっくりミクリの顔を拭き、再び綺麗になったミクリが口を挟む。

ニグアルが完全に固まる。

「あ、お父さんも竜が喋れるの、知らなかったんだ」

場の雰囲気気付かないリーラが楽しげに笑う。

ニグアルはミクリが話せることを知っている。

気分が落ち込んでいたリーラは聞いて無かったのだろうか。

「……リーラ。お前は部屋に行ってなさい」

「え？ 何で？」

「いいから行きなさい」

押し殺したような声。

今にも怒鳴ってしまいそうな。

ようやく雰囲気察したリーラは、渋々といったふうだったが、階段へと向かった。

完全に姿が見えなってから、ニグアルは再び口を開いた。

「ミクリ、さん、でいいのかな？」

「構わん」

ミクリが頷く。

「ミクリさんが言うには、あなたは鼻がいいらしいが……」

「ああ。いい匂いに乗ってマクル草で作った睡眠薬と、ムロウスの種を磨り潰した嫌な匂いが混ざっていたな……毒の匂いだ」

ニグアルは大きく嘆息する。

マクル草を茹でたあとの水は睡眠薬になる。比較的どこにでも生えている草で手に入れるのは容易だ。

うまく作れればスプーン一杯で大人なら眠りこけてしまい、丸一日目が覚めない。

不眠症にかかった場合、この薬で治すことは割かし多い。

ムロウスの種も同じく手に入りやすい。ただし今の時期である春に限るが。ムロウス自体は傷に塗ると薬草として効果を発揮する。

だが種は毒素が強く、扱いに注意する必要がある。

小さな種だが、口に含んだだけでも人が死ぬ。

どちらも僅かに独特の臭いがあるものの、すぐ傍まで鼻を寄せないと匂わないほど、極々微かな匂いだ。

にも関わらず、カルシアはしっかりとその匂いを嗅ぎ取っていた。扉がついていないとはいえ、一つ離れた部屋から。

「とても信じられない……」

ポツリと零す。

「信じようが信じまいが好きにしたらい。問題はそんなことでは無いだろ？」

「まあ……確かに」

ニグアルが苦笑いをするが、すぐに気まずそうな顔へと変わる。

「ん？ ああ、実行しなかったんだから気にしないでいい」

結局入れなかったとはいえ、用意していたという事実がばれたということで、彼を落ち着かなくさせているのだろう。

「……そう言って貰えるなら、有難い」

「入れられたとしても、ワシらに毒は効かんしの」

「そういうことだ。代わりにあんたを殺してただけだな」

ニグアルが小さな笑い声を上げる。

——冗談だと思ったのだろうか？

カルシアは本気だった。悪意を持って害しようとするものに、容赦するつもりはない。リーラの父親だろうと、だ。

そんなカルシアの胸中など知らず、笑いをおさめて話を戻した。

「頼みというのは、盗賊たちのことなのです」

「退治、ということか？」

「察しがいい。そうです。あなたの魔術師としての腕を見込んで、是非お願いしたい」

すぐに返事をせず無言でいると、ニグアルが話を続けた。

「……あいつらには、苦しめられ続けてきた。他所からやってきて、突然住み着いたと思ったら無茶な要求ばかり……。しかもどんどんとエスカレートしてくる。しかし逆らえば殺される。我慢してきた

んだ……。だがあいつらはとうとう、村の仲間を殺しやがった！
もう限界だ！ 殺らなければ、こちらが殺られる！ そう思っ
て出した討伐隊だったのに……。全員、無為に殺されてしまっ
た。私の息子まで一緒に……。私は、被害を大きくしてしまっただ
けだ。……。この村で出せるものは何でも出す。だから……。頼む……」

段々と感情が高まり、最後には声が震えて涙声になっている。
彼は両手を組み、肘を突いていつの間にか祈るような格好をし
ていた。

黙って聞いていたカルシアだったが、やがて、口を開く。

「……何故、あれを用意した？ 奴らの要求とやらのためか？」

マクル草とムロウスの種のことだ。

具体的に言わずとも、ニグアルに正しく伝わる。

「……そうだ」

「俺は要求とやらを知らないが、何を要求されたんだ？」

「……君たちだよ」

「俺たち？ 俺とミクリか？」

ミクリがピクリと首をもたげる。

「正確には君とリーラだよ」

「リーラか……。なるほどな。獣人は高く売れる」

「そういう事だ。……。要求されてからずっと悩んでいた」

「ふん。悩んでいようと、結局渡せば意味はないだろ」

どれだけ悩んでいようと、どれだけ苦しんでいようと、最終的に
盗賊に従って娘を渡せば、盗賊に与したことと同義だ。

そこにはどんな大儀も存在しない。

カルシアはそう思っている。

だがニグアルは違う考えのようで、嫌そうな顔をしている。お互いに口にはしなかったが。

「リーラが狙われた理由は分かった。むしろ今まで狙われなかったのが、不思議なくらい幸運だったな。それで、どうして俺が狙われる？」

「……リーラを助けたのが原因だな」

ますます嫌そうな、というよりも苦々しい表情浮かべて、説明を続けてくれた。

「あいつらが、私たちを狩りの的にして遊んでいる時に、奴らの仲間が一人が来てな」

狩りの的、と聞いてさすがに顔を顰める。

襲われたと思われる時間から、結構な時間が経っていたわりには、被害が少ない気がしたが、これが原因だったのか。

リーラを助けた時の距離や時間を考えたら、村人が全滅していて普通だった。

「戻ってきた男は仲間二人が、教会の人間に殺されたと言ってたよ」

逃したあの油顔の男だろう。

ニグアルはまるでリーラを奴らから助けたことを、知っているような口ぶりだったが、これで納得がいった。

「その報告をムオラ、奴らのボスだが、そいつが私たちに要求してきたのだ。リーラを渡すことと、あんたを渡すことを。どちらかで

も拒否すれば、私たちを皆殺しにすると笑って言いやがった。遊んでやがるんだ……」

ムオラ……聞き覚えがある。

どこで聞いたのだったか思い出そうとしたとき、玄関をノックする音が響いた。

06 ニグアルの苦悩

「どうぞ」

訪問者が誰か分かっているようで、ニグアルはすぐさま促す。

玄関を開けて入ってきたのは、カルシアに逃げろと伝えた、あの若い男だった。

彼はカルシアに軽く頭を下げたあと、ニグアルの傍まで寄っていた。

「一応、準備だけは出来ました。ただ他の皆が意識を失っていたり、怪我したりで、すぐにはちよつと……」

「分かった」

男は今度はニグアルに頭を下げ、そのまま出て行こうとする。

「待て。どういうことだ？」

出て行こうとするのを呼び止め、尋ねる。

男はゆっくりと振り向いた。

「あんたが優秀な魔術師だというのは知っている。だからといってあんただけに戦わせるつもりもない。そんな卑怯なこととはしたくない。もし、あんたが断ったとしても、俺たちだけで戦うつもりだ」

言うだけ言うと、顔を背け、彼は出て行った。今度はカルシアも呼び止めなかった。

どうやら事態が動き出したようだ。ニグアルの腹は魔術師であるカルシアを筆頭にして、盗賊団を殺すつもりなのだろう。

カルシアがいれば、今の戦力でも可能と踏んだのだ。

若者の最後の言葉はニグアルの指示ではあるまい。彼の意気込みだろう。

しかし、辛うじて戦えそうだった村人のほとんどは、カルシアが吹き飛ばした時、気を失うなどして動けないはず。

「盗賊とかいうのはお主たちだけで、勝てるような相手なのか？」

ミクリが小首を傾げて訊く。若者の言葉を真に受けたようだ。

「いや、おそらく無駄だろう。それでも私たちはやらなければなら
ない」

「まるで自殺じゃな」

ミクリの口舌には容赦がない。

だがニグアルは苦々しく笑うだけだった。

「……どれぐらいの人が集まったんだ？」

「女子供以外全員。私も行くつもりだ。全部で15人だな。……も
つともかなりの人数が先ほどのことでまだ動け——ん？」

突然、どたどた慌しい足音が階段から聞こえた。

リーラが酷い形相で降りてきたのだ。

驚いているニグアルに彼女が詰め寄る。

「お父さん、何考えてるの？ そんなの死んじゃうだけだよ。やめ
てよ！」

「リーラお前、聞こえていたのか」

「……獣人の聴力を見くびっていたみたいだな」

カルシアはポツリと言う。

彼にしたら気配で丸分かりだったので、驚くことでもない。

カルシアの言葉など、二人には聞こえなかったようで、リーラはニグアルに詰め寄っていた。

「お父さんが行く事無い！ 私が……私が行けば皆助かるんでしょ？ 私が行く！ だから、お父さん達はやめて、危ないことしないで」

リーラは必死に止めようとするが、ニグアルは首を横に振った。少しだけ寂しそうな、穏やかな表情で。

「駄目だ。それは出来ない。私たちはもう、お前を渡すつもりなんて無いんだよ。それにカルシアさんも渡さなければならぬ」

「でもこのままじゃ……」

全員死ぬ。

今残っているのは討伐隊にも選ばれなかった、戦えない者たちだ。彼らが行ったところで、意味の無いことは明白だった。

全て分かっている。

全て分かっている、彼らは行かすにはいられないのだろう。

平和を乱し、仲間を殺した盗賊に一矢報いたい。そういうことなのだ。

そして勝ち目が全く無いわけでもない。カルシアが、魔術師がいれば。

それが彼らの算段だった。

「依頼を受けよう」

二人が行く、行かせないと口論をしていた中、突然口を開いた。口論をやめ、二人共こちらをビクリしたような目で見る。

「受けて頂けるか」

ほっとしたような声。

「だが、私が依頼しておいてなんだが、危なくなったらあなたただけでも、すぐに逃げて貰えないだろうか。恩人を傷つけたくは無いです」

「……分かった」

たかが盗賊相手に危なくなることなど無いが、それを説明するのは難しいし、面倒臭い。

なので、ただ頷くだけにした。

「カルシアさん……なんでそんな無茶なこと……」

「そうと決まればすぐにでも行こう。あと、報酬はいらない。教会の仕事としての範疇だ」

リーラの方を見ずに、立ち上がりながら答える。

ミクリも飛び上がり、玄関へと向かったカルシアに続く。

さらにその後ろをニグアルが続き、カルシアに尋ねた。

「今からですか？　ですがまだ気を失っている者が多い……。起きるまで待つというのは……？」

「その必要は無い。俺だけで十分だ」

「そうですね……。カルシアさん、もう一つ。教会の仕事というのは？」

「こちらのことだ。それよりも、奴らの場所まで案内してほしい」

振り向かずにとっけなく言う。

内心であっさり引き下がったニグアルを訝しんでいた。

——もっと食い下がるかと思っていたが。

「案内ぐらいはもちろんだ。私たちも戦うからな」

「案内役が一人でいい。それ以上は邪魔だ」

「邪魔……」

不快そうな顔をするニグアルである。

命を懸けて戦おうとする彼らには、辛い言い方かもしれない。だがそれだけの人数がついてきたら、確実に死者が出る。

「……リーラは何のようだ？」

とりあえず広場に向かうため、黙々と歩いていたが、来る時に見た放置されている死体を通り過ぎたあたりで、振り返り訊いた。

彼女はニグアルのかなり後ろを俯き加減で歩いていた。耳と尻尾はうなだれて、元気が無い。

——嫌な匂いがする。

この感情がコロコロ変わる少女は、今どんな思いでいるのだろうか。

声をかけてやると、ニグアルの横まで寄ってきた。

「お父さん達が行くなら、私も行く……」

「リーラ！ 駄目だと言ったろう」

「だって、家で待ってたって同じじゃない！ 皆殺されて、あいつらがまた来て！ それなら私だって一緒にいたい！」

ニグアルはぐつと詰まる。

こちらから攻撃するのだ、必ずまた報復がある。しかも今度は男全員で行くことになるのだろう。

残された者たちを守ることが出来ない。

「……他の皆には森に逃げるよう言っている。運がよければ逃げられる」

「逃げ切れないかもしれない。私も一緒がいい」

決然と宣言する。

突然、笑い声が響いた。

「何とも勇ましい娘っ子じゃな。どうせ誰も死にはしないんじゃ、誰を連れて行ってもよからう？」

ミクリはカルシアの気も知れず、暢気な提案をした。
できるだけ、連れて行かない方向で考えていたというのに。

「……とりあえず広場についてからの話しだな」

再び一行が歩き出し、荒れた村の中を通っていく。

広場の前に人だかりができてるのが見えた。

攻める人数は15人と聞いていたが、どうみてもそれより多い。
カルシアが吹き飛ばした奴はまだ眠っているはずなのに、すでに15人を越えている。

もしかしたら、生き残った全員が集まっているのかもしれない。
あの若い彼以外の男といえば、老人かまだ少年のような子供ばかり

りで、やはりとても戦闘に耐えられるようには見えない。

若く力のありそうなのは、せいぜい二、三人だ。

近づいていくと、あの若い男が困り顔で一步前に進み出た。

彼が代表らしい。

「村長、ちょっと問題が……」

ニグアルが訝しそうに、男を見つめる。

「問題だと？」

「ええ。皆が逃げてくれないのです」

「何？」

「俺たちを死なせて、自分達だけが生き残るわけにはいかない、と」

彼の後ろで主に女達がこくこくと頷いている。

「あたしたちだって戦えるんだ。どうせならあたしたちにも戦わせてくれよ」

一人の太ったおばさんがそう言うと、他の人たちもそうだそうだと声をあげた。

頭の痛い問題である。

「駄目だ」

拒否の声をあげたのはカルシア。大きな声でも無かったが、よく通る声は全員に聞こえ、ピタッとざわつきが止む。

ニグアルが頷き、後を続けるように話した。

「その通りだ。君たちは逃げなさい。私たちだけで十分。なあに、

勝算はある。心配なくていい」

虚勢。

誰もが察し、再び場は騒然とした。

それをニグアルが必死に抑えようとしている。

「静まれ！」

再びカルシア。だが今度ははっきりと大きな声をあげ、驚いた全員が口を閉ざし、彼に注目した。

「誤解があるようなので言っておく。この中で俺について来ていいのは一人だけだ。それ以上はむしろ邪魔になる。案内役の一人だけ、それ以外は待っていてもらいたい」

この発言に一番驚いたのはニグアルだ。

「カルシアさん、一体どういうことですかな？」

「どうもこうも無い。さっきから言っているはずだ。余計な死傷者を出したくないなら、言う通りにしてもらおう」

「待てよ」

冷徹な宣告にあの若い男が声を荒げる。

「あんたが皆を吹き飛ばしたのは、遠くから俺も見てた。だけどあんただけで勝てるとは思えん」

「ふん」

——面白いことを言う。

鼻で笑われた男は、不快そうな顔をしつつ、続ける。

「あいつは化け物みたいな力をしてるんだ。魔法だけで勝てるかどうか」

「……時間が惜しい。ニグアル、あんたがついてきてくれ」

「私か？ いや、それは構わんが……」

ちらりと男を窺いながら言う。

彼も本心では男に同意しているようだ。

カルシアはもはや構わず、とりあえず村を出ようと歩き出した男は追いつが、カルシアの肩を掴み、むりやり止めようとした。

「待って！」

「いい加減にしろ」

軽く掌を男の腹に当てる。

すると男の体がくの字に折れ曲がり、吹き飛んだ。

地面を二転三転し、ようやく止まる。

男は意識を失ってはいなかったが、苦しそうなうめき声をあげ、立ち上がれないでいる。

他の者は彼を助けようもしない。

いや、カルシアの力の一旦に触れて、動けないでいた。

「これ以上時間を取らせるな」

再び歩き出そうとしたが、三步と行かずに止まる。

「リーラ……お前もか？」

リーラが強張った表情で目の前を塞いだのだ。

イライラし始めていたカルシアは、キッと彼女を睨む。

「……私に案内させてもらえませんか？」

「何を言っている。お前はここにいなさい」

ニグアルが多少声を荒げる。

「駄目ですか？」

しばらく目の前の少女を睨んでいたカルシアだったが、ふっと目の力を弱める。

「いいだろう。ニグアルの代わりに案内してもらおうか」

とたんにリーラの表情が緩み、小さな笑みを浮かべた。

「何を考えているんだ！」

同時に怒声も飛ぶ。ニグアルだ。

「娘をなぜわざわざ危険なところへやろうとする！」

「彼女があんたより覚悟を持っているからだ」

「なに？」

カルシアは説明をせず、代わりに笑みを浮かべる。
久しぶりに浮かべた、自然な笑みだ。

「それだけの覚悟を持つ奴は好きだ」

——意味があるとは思えないが。

それは口にせず、頭二つ分ほど小さい、彼女の頭を撫でながら褒める。

納得いかないのはニグアルである。

「リーラを案内になんていかせられん！ 絶対に駄目だ！」

憤慨しているニグアルを軽く睨む。

突然だった。

カルシアがニグアルの首筋に、手刀を打ち込んだ。

集まっていた村人たちには、残像にしか見えない速度で。

手刀を打たれた彼は気を失い、倒れそうになったのをカルシアが抱きとめ、ゆっくりと地面に寝かせる。

「お、お父さん……」

「寝かせただけだ。時間がかかりそうだったからな」

悪びれた様子もない。

リーラも頷いただけで、非難はしなかった。

説得できるとは彼女にも思えなかったから。

呆然とする村人達を置いて、彼らは歩み始めた。

07 審判

呆然とした村人達を置いて、村を出たミクリを含めた三人は、リーラの案内で廃墟とやらの向かっていった。

リーラによると、森を回りこむように行くと着くらしく、すっかり静かになった森を右手にして歩んでいた。

「リーラ。一応訊いておくが、どうするつもりだったんだ？」
「どうって……？」

声を震わせながら聞き返す。
だらんとぶら下がっている尻尾と、手も微かに震えている。

「ムロウスの種、それにマクル草も持ってきてるな。それでどうするつもりだったんだ？」

ピタッと歩みを止める。
喋ることを戸惑うように視線を泳がせたが、やがて諦めたのか、ボソボソと話し始めた。

「……もしカルシアさんが殺された時には、私自身を人質にしようと思ってました。そうなら目的は私だけになりますし、私は高く売れるそうですから」

寂しげに笑う。

——やはりこの子は皆を救おうとしたのか。自分だけが犠牲になつて。

思わずため息が出る。

「残念だが、意味はあまりないな」

「え？」

「獣人は死んでも価値はほとんど変わらない。多少落ちるがな」

「他にも理由は多いがの。言う事を聞いた振りをして、隙を見て種を取られ、それで終わりじゃな。大体、今から殺しに行くんじゃ。それは要求を呑んだとは言わんし、奴らがそれを許すとも思えんしの」

ミクリが後を引き継ぎ、とうとうと事実を述べていく。

「そうですか……。駄目ですね、私……。せめて皆を守りたかったのに」

「俺は立派だと思う。自分を犠牲にして他人を助けようというのは、意外と難しいんだ」

——ニグアルも表面的にはともかく、内心では他人のことを考えていなかった。

最初はカルシア達を突き出そうと毒と睡眠薬を用意し、カルシアの実力が分かると攻めようとした。

いや、攻める振りをした。村長と村人の間の信頼関係は希薄だ。

だがそれはニグアルと同年代の中で、とカルシアは読み取っていた。若い奴とは比較的信頼関係が築けている。

休んでいるうちに外へ行っていたが、演技をするように、ということだとカルシアは踏んでいる。

カルシアを乗り気にさせるために。

ニグアルの計算では、カルシアさえ行けば全員倒せなくても、大打撃を与えることは可能とでも考えたのだろう。

そうなれば残りの人数でも何とか倒せる。うまくいけば残った盗賊たちは、どこかへ差っていくかもしれない。

念のために若い奴を何人かついて行かせれば尚いい。

若い奴は本気で、年寄り演技で、ついて行くと言ったことをカルシアは見破っていた。

カルシアがすぐに行くと言った時、止めようとしなかったのは、もともと行くつもりがなかったからだ。

本当に村人の事を考えていたのなら、今夜中に逃げれば良かったのだ。森の中に猛獣は居ないのだから。

盗賊は30人程度、とても森の中を探しには回れない。

彼は狡猾だったと言える。

だが、と思う。

——もし引き受けないと言ったら、どうするつもりだったのだろうか。

そしてようやく思い出した。

——ムオラ。

思い出した今、これが引き受けざるを得なかった依頼だと気がついていた。

——やはりニグアルは狡猾だ。

それを考えると、リーラはやはり立派なのだと思う。

考えの足りない点が多い。

だが皆を助けたいという気持ちだけは伝わる。

——惜しいかな、知識と実力が足りない。

カルシアはそう思うのだ。

だがリーラは恥ずかしそうに俯いているだけだった。

そろそろ行こうかと先を促すと、リーラが再び歩き始めた。

「……ところで、なんでマクル草を持ってきたんだ？ 睡眠薬になるのは茹でた後の水だろ？」

「え？ そうだったんですか？ 私、知らなくて……台所にあったそれらしいのを、持ってきたんですけど」

「なるほどな……リーラは少し勉強もした方がいいな。種の方は口に含むだけで死ぬから、気をつけろよ」

リーラがビクリして振り向き、それ見てミクリが声をあげて笑っていた。

だがカルシアはふと引かかるものを感じた。

それは極々小さな、違和感でしかなかったが……。

二十分ほど歩くと、森を背にした廃墟が見えてきた。とはいえ、壁が崩れたり、窓が割れたりという様子はなく、住もうと思えば問題の無さそうな、大きな屋敷だ。

松明が掲げられ、見張りすらもよく見えた。

気付くのはこちらの方が早かったが、そのうちに向こうも気付き、仲間を起こしに屋敷の中へと戻っていった。

カルシア達が屋敷に着いた時には、すでに盗賊団のおそらく全員が待ち構えていた。

彼らと、ある程度の距離をもって、立ち止まる。
緊張した沈黙が束の間続く。

——きつい死臭がする。

顔を顰めているとやがて、盗賊団の中から一人、前に歩み出た。
あの時の油顔の男だ。

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている。

「まさかてめえらから、出向いてくれるとは思ってなかったぜ」

リーラがカルシアの背後に隠れるように移動する。

実に嫌そうな表情を浮かべながら。

「よくもマイトとサミアラを殺りやがったな。たつぷり礼をしてやる」

口上を聞き終えたとき、思わずため息を長々と吐いてしまう。

——多ければ勝てるでも思っているのだろうか。

「……実に見事な小悪党っぷりだな。残念だが俺たちはそんなくだらないことを聞きに来たわけじゃない。ムオラというのはお前だな？」

油顔の男は顔を真っ赤にして、何か言おうと口を動かしたが、一人の逞しい男に下がるよう言われ、大人しく従った。渋々だったが、代わりに前に出た男は傍目からでも、筋肉が隆起しているのがはつきりと分かる。

腰には通常よりも大きな剣を差し、不敵な笑みを浮かべている。
傭兵上がり。

まさにそんな感じの男だった。

「確かに俺がムオラだ。てめえは教会の死神らしいな」

ミクリに視線をやりながら確認してくる。

竜を連れているものなど、今の時代死神ぐらいしかありえない。その小さな竜は目を細め、ムオラの顔をじっと見ている。

「間違いなく、其奴がムオラじゃ」

ミクリが喋ったことで、盗賊団の連中がざわざわと騒ぐ。

「つるせえ！　ちっと黙ってろ！」

ムオラの怒声により、一瞬にして静まり返った。

「喋れるたあ、珍しい竜だ。実に高く売れそうだな」

すでに勝ったと思っているのか、売った時の想像をしているようで、舌なめずりしている。

ミクリが喋るのを聞いた盗賊達は、大抵同じ反応をするのである。驚くか、ニヤニヤと売った時のことを考えて、笑うか。

「ところで村の連中はどうしたあ？　俺は確か、連れて来いつたんだがな。自発的に来させろとは言わなかったなあ。これはあれだな？　要求拒否と同じだな？」

ムオラが無精ひげを撫でながら言う。

くだらない難癖だ。

すぐにでも斬りたいが、まだ少し早い。

全員をジャッジで斬るには、少し足らない。

このままだと、クオルしか斬れない。

どうするかと考えている間も、屋敷から流れる死臭が鼻について、落ち着かなかった。

——いや、この臭い。

あいつらが元々強い死臭を纏っていたので、気がつかなかった。
ミクリに森の中へ行かせようと口を開けたが、先にリーラの声が飛んだ。

「あなたたちが皆を殺したの？」

水を打ったような静寂。

次の瞬間、盗賊達の間でどっと大きな笑い声が沸き起こった。

リーラがビクッとして再び隠れる。

笑っている者の中には腹を抱えているものもいるが、目に涙を浮かべているものさえいる。

おかしくて仕方無いといった様子だ。

「お前、ここまで来て馬鹿かあ？ 全く別の誰かが殺したとも思っているのか？ 当然俺たちが殺したに決まっているだろうが。くくく……」

堪えられないというふうに語尾が笑いに染まっている。

リーラは顔を真っ赤にしていた。むろん、恥ずかしいのではなく、怒りで。

盗賊達に一切悪びれた様子は、見当たらなかった。

「……つまり、お前達全員であの悪行をした、という事でいいんだな？」

「ああ、ああ、そうだ。俺たちがやったなあ。楽しかったぜ、人間

狩りはよ。赤ん坊抱えて逃げ回る奴もいたな。そういう時は赤ん坊から殺してやるんだ。母親の目の前だな。ありや傑作だぜ。わんわん泣いてよ」

ムオラは涙を拭きながら可笑しそうに言った。

「最低じゃのう、お主ら……」

普段表情の見えないミクリが、はつきりと怒りを顔に浮かべている。

カルシアも胸の辺りがむかむかしていたが、別の事も冷静に考えていた。

——結果的に森に行ってもら必要は無くなったな。

「カルシア」

「分かっている」

一歩前に出ると、ムオラは後ろに下がり、他の盗賊たちが壁を作るように移動した。

気の早い何人かはすでに剣を抜いている。

一歩、一歩とゆっくり進んだカルシアだったが、突然体がぶれた。目の錯覚。

この場に居た全員がそう思った。直後には何の変哲も無かったからだ。

しかし大きく変わった点が二つ。

カルシアはいつの間にか後ろを向き、右手に剣が握られている。柄を持っているわけではなく、刃の部分を。五本の指先で。

さらに言えばカルシアの武器は抜かれていない。

「あれ？ 俺の剣……」

呆然とした声。

壁を作り、剣を抜いた一人だったのだが、彼の手の中から剣が消えていた。

カルシアがまさしく目にも留まらない速度で、剣をもぎ取ったのだ。

正確に状況を把握できた者が、この場にどれほどいただろうか。人間業とは思えない力。

見せ付けられたところで、到底信じられるものではなかった。

だがムオラだけにははっきりとその動きは見えていて、不敵な笑みの中に、驚きを漂わせていた。

「ミクリ」

剣を持ち直し、真っ直ぐ上に立てると、ミクリが刀身に触れた。わずか数秒ほど。

背を向けたカルシアを斬るには、絶好の機会だったにも関わらず、誰も動けないで居た。

カルシアの発する覇気。

これが盗賊たちの動きを鈍らせていた。

「もうよい。この男、村の人間を三人殺しておるな」

それを聞くと、カルシアは再び盗賊達に向き直った。

「証拠、証言、自白の全てが揃った。これより審判を降す」

声を張り上げるでもなく、宣言する。

「審判だあ？　ふざけてんのか？」

ムオラが抗議の声をあげるか、聞こえていないかのように続ける。

「ニグアル、リーラの証言。盗賊団が村人を虐殺。盗賊団はこれを認めた。またメモリードラゴンの能力により、盗賊の一人が三人を殺傷したことを確認。全員が同程度の殺傷を行ったものと断定する。またムオラをキリエルラ教会より手配されている、騎士殺しの重罪犯と断定。全員に審判を下す。ジャッジによる、断罪とする」

カルシアは宣言した。

08 死神カルシア

「……お前、何言ってやがんだ？」

ムオラが呆れた声を出す。

彼の周囲では失笑すら洩れていた。

それほどカルシアの言は意味の分からないもので、宣言する必要があるか分からない。

リーラすら怪訝な表情を浮かべていた。

だが一方のカルシアはまじめな表情で、背中に負った大剣を止めるための、ベルトのようなものを外し始めている。

慣れた手つきで、あっという間に鞆ごと外してしまった。

今まではマントで隠れて、全容が見えなかった大剣が、初めて姿を現した。

「おいおい、なんちゅう大きさだよ……」

ムオラが咄然とするのも無理はなく、この剣はカルシアとほぼ等身大の大きさを持つ。

銀に光る重々しい鞆を外すと、その場に落とす。

ずんという鞆とは思えない、重量感のある音を発した。

そしてカルシアの右手には、鞆から引き抜かれた長大な剣が雄々しく輝いていた。

輝いていた、という形容は正しい。

大剣はまるで夕日のように、穏やかな赤い色を発し、見るものを惹き込ませた。

時々、カルシアの緋色の目に呼応するかのように、刀身の輝きが波打つ。

「これは死神専用武器、ジャッジ。姿かたちは様々だが、特性は変わらない」

「特性だあ？」

「斬ったものの魂を地獄に送り、最後は消滅させる」

ムオラは醜悪な眉を顰める。

魂、と言われて真剣に受け取れるわけが無い。笑い飛ばしてもいいぐらいだ。

だが誰も笑い飛ばせない。

話しがどうこうでなく、長大な大剣を片手で軽々と扱うカルシアの臂力が、盗賊たちを黙らせていたのだ。

事実、カルシア以外が持とうとすれば、大人四人がかりで無ければ持ち上げることも出来ないのだ。

「覚悟はいいな」

おもむろに一步踏み出す。

「相手はたかが一人だ！ てめえら、囲んで殺せ！」

ムオラの命令を皮切りに、一斉に動き出した。

勇気ある一人が正面から切りかかる。

蛮勇でしかない。

男が剣を振り上げた時、片手で大剣を軽く横なぎに振る。

ごうっと風を巻き起こしながらの、一閃。

赤い弧が男の真ん中を通り、描かれる。

胴の真ん中から男は二つに分かれた。

斬られた時の勢いで、死体は転がって行ったが、視線で追う暇もなくすぐさま次が来る。

三人、正面から同時。

——怯まないな。

微かな驚きだった。大抵はあれで怯む。

考えたのも束の間、三本の剣が迫る。

大剣を横にして一人の剣を捌き、一つの突きを同時に剣複で受け止める。

その二つの動作を同時に行うと、最後の一人の剣を上弾き、袈裟切りに斬る。

驚いたことに、この動作は三人が剣を振り切る前に行われている。本来防御すら必要ない速度。だがカルシアはあえて防御を加える。相手に絶望を与えるための下準備として。

続いて横なぎに二人同時に襲う。

三人全員が二つ以上の体に分かれていた。

威力は大剣以上、素早さは素手並みに。

カルシアの剣は赤い残像ばかりを残した。

瞬時に四人殺され、ようやくここで盗賊たちに動揺が走る。

ただしムオラだけは冷静だった。少なくとも表面上は。

不敵な笑みこそ消えていたものの、仲間に関わらず指示を出していた。

「次！」

ムオラが指示を出している間に、斬りかかってきた二人を逆に斬り殺す。

再び一人が切りかかってくる。この状況で一人で、というのは勇氣ある行動だが、これもまた蛮勇でしかない。

無造作に剣を振る。

それで十分。そう判断したが、カルシアの予想外に男は剣を立てて防御をした。

——驚いた。

防御したことではなく、反応したことについて。見えている者はムオラばかりだと思っていたのだ。

だがカルシアを驚かせた男も、そこまでが限界だった。

カルシアの大剣は通常の剣など問題にせず、二つに剣を切り分け、男も同時に切り分けた。

目に見えて盗賊たちの戦意は鈍り始めていた。

防御したのは全員に見えていたが、防御しても剣が紙切れのように斬られる様も見てしまっていた。

「仕方ねえな。お前ら、しっかり補佐しろよ」

そう言うが早いか、ムオラ自身が斬りかかってくる。

思っていたより早く来ただけに、意外の感が否めなかったが、それだけに困った。

今ここでムオラを殺すと、仲間達が逃げ散り、明らかに手間だ。というより面倒臭い。

どうせなら順々に他の盗賊を斬った後に、殺りたいところだった。上、上、横、逆袈裟懸け、突き。

カルシアの考えなど知らず、どんどんとムオラは攻撃を続ける。意外と一撃が重い。常人にしては、だが。

しかしそれ以上に、左右から攻めてくる部下との連携がまた絶妙で、うまく攻撃の隙を作らせない。

右を止めたと思ったら左から。

上を止めたと思ったら下から斬りかかってくる。

二箇所同時というのも、狙ったように頻繁だった。

時には大剣を横にし、時には打ち払いそれらをあしらう。

ムオラの表情を見ると、わずかな焦りがある。

カルシアがギリギリで防御している、のではなく、余裕を持って

防御しているのが、分かったためだ。

余裕。

確かにカルシアにはあった。

傲慢にすら思える絶対的な力量差を、最初の一太刀で感じたのだ。だからこそ彼に珍しく、緩慢になった集中力。

ゆえに、彼は気付かなかった。

「きゃあ！」

リーラの悲鳴が聞こえるまで。

ハッとして後ろを振り向く。

リーラがまたあの油顔の男に捕まっていた。

後ろから腕で軽く首を取られ、もう片方の手で首筋に剣を当てられていた。

油顔男は嫌らしい笑みを浮かべている。

ミクリはいつの間にかやら、手の届かないような上空に飛んでおり、難を逃れている。

「これで形勢逆転、だな」

ムオラがにやりと、再び不敵な笑みを浮かべた。

「ふむ……卑怯だな」

「何とでも言え」

リーラは震えていないが不安そうな顔をしている。「捕まっていめんなさい」とでも思っていそうだった。

「さあて、まずはその物騒な大剣を捨ててもらおうか」

ムオラが命令する。

「お前、これぐらいで俺を追い詰めたとか、勘違いしているのか？」

余裕綽々である。

「てめえ、何ふざけてやがる！ 状況分かってんのか！」

「状況？ 何か問題でもあるか？」

ムオラが凄むが、一向に意に介さない。

馬鹿にされていると思ったムオラの顔が、たちまちに赤くなり、笑みも消えた。

「――お前はもう死ね！」

激怒したムオラは剣を大きく横に振る。

カルシアはなんだかんだ言っても、抵抗できないはず。

そう考えての行動だったのだが、実際にはあっさりと大剣で払ってしまった。

続けてカルシアは片手をおもむろにあげた。

油顔男に向けて。

「ぐあ！」

油顔男が吹き飛び、地面を転がる。

自分の剣で体を傷つけたのか、ところどころに切り傷が出来ている。

起き上がらないところを見ると、気を失ったようだ。

リーラが驚いて吹き飛んだ男を見ていた。

「魔法……？ 魔術師か！」

ムオラが後ずさる。

人質は取り返された。剣は相手が上。逃げても魔法が飛んでくる。盗賊たちはどうすればいいか、分からなくなっていた。

「さてと」

軽く盗賊たちを見た。

決して、睨んではない。

だが威に打たれた盗賊たちは――逃げた。

予測していたかのように動き、三人同時に斬る。

返す動作でさらに二人。

大剣の大きさを利用し、どんどんとまとめて斬っていく。

「やはり面倒になったな」

ボソリと愚痴る。

最後の数人はバラバラに逃げてしまったため、急いでその後ろを追う。

まずは比較的近かった一人を後ろから横なぎに。

続いて森に逃げようとしていた奴を追う。

振り向いた彼にはカルシアが巨大化したように見えただろう。

焦点の合う速度が間に合っていないのだ。

次の瞬間、驚きの表情を浮かべたまま、彼の首が落ちる。

森に入ろうとしていた、近くのもう数人。

一人斬り、もう一人を斬る。

赤い弧を次々に生み出し、その度に一人以上を切り殺していた。

赤い弧は剣の輝きのためか、剣に付いた血のためか、もはや分からなくなってきた。

ふと嫌なものが目に入り、近づく。

すでに森に逃げようとした盗賊たちは、全員片付けたからだ。

それでも急がないといけないことに変わりはない、動き自体は素早い。

すぐに見えた。

木々の生い茂る森の中に、討伐隊の死体の山。

ずっと臭っていた死臭の正体。

それがこれだった。

「ここに捨てたのか」

ボソツと言うと、すぐさま身を翻す。

感慨にふけてっている暇は無いのだ。

リーラたちの場所まで戻る。

体が欠けたまま、未だ生きてしまっている盗賊の中に、ムオラはさつきと変わらない様子で佇んでいた。

ただ顔色は悪い。

二十秒ほどは経っているはず。

何故何もしなかったのだろうか。

……どうしようもなかったのかもしれない。

下手に腕が立つから、察したのだろうか——自分の死を。

彼の横を通り、屋敷の横へ向かう。

死角になったその場所に、首を伸ばすと——一人隠れていた。

見つけると、ちょっとした木陰になっていた、その場所から出てきた。

顔を恐怖に歪め、剣を前に構える。

面白いように剣先が左右に大きく揺れている。

「た、たすけて……」

震えた声。

だがカルシアの足を止めることは出来なかった。
ゆっくり近づき、大剣を振り上げ、

「や、やめ——」

振り下ろす。

男は綺麗に左右に分かれ、それぞれの方向に倒れていった。
一瞥するとムオラを斬るべく、歩を進める。

戻るとやはり、ムオラが呆然と突っ立っていた。

「残ったのはお前だけだ」

「……すっかり忘れていた」

カルシアを目の前にし、別の話しを始めた。

「滅んだ、と聞いていたなあ……」

「何の話しだ」

「とぼけても無駄さあ。すっかり思い出した。お前、竜人だろ？」

力人は人を遥かに越え、魔力に満ち、並みの臂力では傷すらつかない
……ただの伝説だと思ってたんだがなあ……」

可笑しそうに喉の奥で笑う。

もはや観念したかのような笑いだった。

「並みの臂力では傷すらつかない？ 試してないのに分かるのか？」
「いや。だが無駄な気がするなあ」

カルシアは内心鼻白んでいた。

——せっかくわざと斬られてやろうと思っていたのに。

絶望させたかったのに、失敗だった。

「……残念だが、俺はただの死神カルシアだ。騎士殺しのムオラ。覚悟はいいな」

「無駄だと分かっているが……抵抗はさせてもらうさ」

どこか吹っ切れたように言う。

「……人を越えた奴に殺されるなら悪くはない」

ムオラが先制。

突然にカルシアに向かって突っ込む。

勢いのまま、横なぎに。

剣を立ててそれを弾く。

が、ものともせずに縦、横と剣を振るう。

一撃一撃が人間にしてはかなり重い。

相当の使い手のはず。

並の人間なら、すでに殺されている。

あいにく彼の相手は人間ではなかったが。

カルシアはそれらの攻撃を、余裕を持って弾く。

大剣を器用に細かく操っている。

臂力の差。

それがムオラに決定的な隙を作らせてしまった。

上からの一閃。

剣を立てて受け、器用に受け流す。

地面ギリギリまで下がったムオラの剣を、上から素早く斬る。
あっさりと棒切れのように、ムオラの剣が二つになった。
ムオラは驚き、一歩後ずさった。

後を追いかけるように、右下からの袈裟切り。
それで終わった。

09 旅立ち

「終わったな」

血の匂いとうめき声の中、ポツリと言う。

人は胴が切れた程度ではすぐに死なない。もちろん即死しない、という意味で。

彼らは数分、苦しみの声と怨嗟の声をあげる。

ちらりと目をやると腹から腸がはみ出ていたり、脳漿が出ていたり、なかなか気味の悪い風景が広がるが、カルシアはすでに見慣れてしまっていた。

運よく手が繋がっている奴は、自ら止めをさす。

カルシアが彼らにとどめをさすことは無かった。

——今まで人を不幸にした分、最後は苦しみながら死ね。

そう考えているのだ。

「いや……あいつを忘れていた」

胴が半分になり、うつろな目を浮かべているムオラから目を離す。

彼はまだ微かに息があったようだが、すぐに死ぬ。

止めを刺すようなことはしない。

——苦しみながら死んでいけ。

彼はそれだけの事をしたと思っている。

裏切り続きの人生。

傭兵としてかなりの腕を持ちながら、多くの国から疎まれ続けて

きた男。

最後には数人の仲間と国の千人将を襲撃し、盗賊へと身を落とした男……

——八つ当たりは駄目だろ。

リーラのさらに向こうで、寝ている油顔男に視線を移した。ゆっくりと近づいていき、横に立つと剣を振るい、首を落とす。

「これで完全に終わりだ。さて帰るか、リーラ？」

リーラに視線を移す。

酷く表情が強張っていた。

「俺が怖いかな？」

まっすぐにじっと見つめる。

リーラは肯定も否定もしなかった。

代わりに微かな怪しい光を目に湛えている。

「……力って怖いすよね。こんなに人が死んで……」

「こいつらが死んだのは自業自得だ」

「あ、カルシアさんを責めてるんじゃないんです。ただ……力が無いと、こうも一方的なのかなって」

「だから力のあるやつが守らないといけないんだ……」

思わず苦々しく、吐き出すように言っけししまい、顔を顰める。

「……そうすよね」

頷き、黙り込んでしまった。
ふうっと一つ息を吐く。

「……帰るか」

村に戻る道すがら、カルシアの横にはミクリが飛び、数歩分ほど遅れてリーラが歩いている。

何かを考えているようで、彼女は一切喋らない。

ミクリは元々あまり喋らないので、いつも通りだと言える。

彼女が声をかけてきたのは、そろそろ村が見え始めるかどうか、という頃合いだった。

「カルシアさん、ちょっといいですか？」

「どうした？」

立ち止まり、振り返って問う。

すると彼女の真剣な表情が目に入った。

どこかしら、やつれてもいる。

人を殺すところを初めて見たのだろうから、それは仕方の無いことかもしれない。

「いつ村を出るんですか？」

「夜が明けたら」

「そんなに早く……」

一度目を瞑り、俯く。

しかしすぐに顔を上げた。

「私も連れて行ってくれませんか？」
「何じゃと？」

驚いたのはむしろミクリだった。

「どうしてそんなことを？」

「カルシアさんから旅の話しを聞いて、憧れたんです。私の知らないこと……。世界、知識……。そして力。私、何も知らないんだなあって」

「世界を知りたいから、旅に出たいのか？」

「確かにそれも目的です。……。だけど、私はそれ以上に力が欲しいんです」

ぎゅっと手を握り締めた。

「大切な人を守るための力……。ただ逃げるだけ、守ってもらうだけは嫌なんです」

「……その何が悪い？ 逃げること、守ってもらうことが」

リーラが首を横に振る。

「良い悪いの問題じゃないんです。私は守るための力が欲しいんです」

真っ直ぐと見てくる。

「正気か、お主」

「正気です」

「旅は楽しいばかりじゃないぞ？ 辛いこともある」

「分かってます」

「分かっておらん。しかも基礎が出来ているならともかく、力を求めるためなぞ——」

ミクリが説得を始める横で、二人の会話を聞きながら、ようやく気がついた。

——力への羨望。

時々見せていた、瞳に光る怪しい光。

あの父親だ、きっと今まで大切に守られてきたのだろう。

それがこの子を真っ直ぐに育て、反面守られることへの反発が生まれた……

ここで断ってもいい。

とても旅に耐えられるような力を、この子は持っていない。

だが断れば……この子は将来駄目になる。

分かるだけに迷う。

どちらがこの子のためになるのか……

「——で、カルシアはどうするんじゃ」

急に話を振られ、ハッとミクリを見返す。

気がつけば、リーラもこちらに綺麗な目を向けていた。

「何じゃ、聞いとらんかったのか。お主が珍しいの」

「すまん。それでどうした？」

「結局のところ、お主次第、ということじゃ。お主の結論に従う」

——なるほど、こちらに投げたのか。

「そうだな……」

しばしの沈黙。

ミクリもリーラもじっとカルシアを見る。
そして結論。

「ニグアルが構わないと言えは連れて行こう」

とたんにリーラの表情ぱあっと笑顔になる。

反対にミクリは顔を顰めている——ように見える。

「良いのか、それで」

「ああ」

放っておくと駄目になることが分かっているなら、連れて行った
ほうがいい。

——幸いにも俺と同行する。ならよっぽどの事が無い限り守れる。

カルシアはそう考えたのだった。

軽い足取りのリーラ、ぶすつとした顔のミクリと共に、村に帰っ
ていった。

「行かせてよ！」

「駄目だ！」

このやりとりがどれほど続いただろうか。

ミクリは眠そうに時たま欠伸をしている。

村に戻った当初は村人全員が驚き、続いて喜んでいた。

思い思いに手にしていた武器を投げ出し、大騒ぎだ。中には泣き声も混ざり、非難の声もあった。

「どうしてもっと早く殺してくれなかったのか」

逆恨みもいいとこだ。

そんな彼らを横目に、上機嫌なニグアルと共に、彼の家に行った。だがリーラが旅の話しを切り出したことで、彼の怒りが一瞬で沸点を越えた。

そしてこのやりとりが延々と続いている。

説得はリーラがするべきだろうと思っているので、カルシアはほとんど口を挟まないようにしていた。

「私は今のままじゃ嫌なの！ 何も知らない、力もない。それを変えたいと思うのが何で駄目なの！？」

「駄目に決まってるだろ！ そんな危ないこと、絶対に許さん！」

怒声がずっと飛び交っている。

こうなる予想はしていた。

だがそれでも、変わりたいと思うなら最初に乗り越えるべき壁だろう。

——これも修行の一つ。

そう思っていたのだが……どうにも違和感が出てきた。

ニグアルの主張は一貫している。

行くのは許さない。

それだけだ。

——普通、だとは思う……おかしいところはない、気もする……

だがどこか……

違和感の正体がつかめない。

あまり気にしなくてもいいのかもしれないが……

「リーラ。後は俺が話してみる」

「え？」

今まで黙っていたカルシアの、突然の提案にリーラが驚く。

まじめに交渉するつもりなどあまり無いのだが、少しニグアルと一対一で話してみたかった。

「ちょっと二階に行ってももらってもいいか？ ついでだからミク

リを連れて。もう眠そうだからな」

「……はい、分かりました」

リーラが机の上でぐたっとなっていたミクリを抱き上げ、二階へ向かう。

何度か不安そうに振り向きながら。

完全に姿が消えると、防音の魔法をかけ、音が洩れないようにした。

「リーラを旅に出すのが、それほど嫌か？」

「当たり前だ」

むすっとした答え。

譲る気はないというのが見て取れる。

「危険だからか？」

「そうだ。娘を危険な旅に出したい親などおらん」

「ふん、確かにな。だがあの子は変わりたがっている。守られてばかりでは駄目だと気付いたんだ。それを応援するのも親じゃないのか？」

「親が子を守るのは当然だ。カルシアさんといえど、私は譲る気はない」

断固とした口調。

思わずため息がでる。

「子の成長を願うのも親だと思うがな」

「私は安全を願っている。何かおかしいか？」

「いや。それはよく分かる……そうだな、条件付きならどうだろう？」

「条件？」

「ああ。あの子、養子って話しだからな。本当の両親の元に連れて行ってから、すぐに返すというのは——どうかしたか？」

ニグアルの視線が泳ぎ、顔を僅かに顰めた。

「……あの子の両親は死んだよ」

すぐに取り繕ったが、カルシアの目には、異常にしか見えなかった。

——動揺？ 何故？

「両親が死んだ、か」

——まあ分からない理由ではない。

だが反応がおかしい気がする。

リーラの様子だと両親のことは覚えていないのだろう。

もしくは覚えていても、微かな記憶のように見えた。

それほど昔なら、ニグアルとの関係はしらないが、心の整理は十分できているはず。

「死因は？」

「……盗賊に襲われて、な」

「……今回の盗賊たちのような？」

「似たようなものだ」

声音に動揺は無い。

「そうか。可愛そうなことだ。犯人はどうした？」

再びニグアルの視線が泳ぐ。

だが先ほどよりは短い。

「まだ捕まっていない」

「そうか……」

一つ、閃いたことがある。

突拍子も無い話したが、あり得なくは無い。

「なら教団に調査させよう。時間はかかるだろうが、何とかなる」
「それは……」

ニグアルの口がパクパクと動くが、うまく声になっていない。
その様子を見て確信した。

三日後。

ミクリが隣を飛び、反対側にリーラが歩いていた。

「本当にありがとうございます。父を説得してくれて」
「何、たいした事じゃない」

リーラが目を輝かせながらお礼を言う。

希望に満ちた目。

見ていて眩しくなる。

カルシアはあの後、ニグアルの承諾を得たため、リーラを連れて行くことが決定した。

ただしリーラは初めての旅ということもあり、準備に一日時間を費やした。

さらに次の日には村の皆に見送られての出立。

あの若者は涙を流して別れを惜しんでいたが、彼の親の世代辺りの村人は一様に複雑な表情をしていた。ニグアルなどは苦々しそうな表情を浮かべていた。

そして今。

リーラにとって初めての野宿をした後の朝。

もう何度目かになるカルシアへの御礼からしばらく経った時、

「カルシアさんってどれぐらい旅、続けてるんですか？」

唐突に訊いて来る。

「もうどれぐらいになるか、分からないほど」

リーラに視線を向けると、なぜかキョトンとした目を向けていた。

「どうした？」

「いえ……」

「遠慮はいらない」

「えっと、それじゃ……なんでまた、森に迷うなんてことに？」

「……ミクリのせいだな」

ミクリがそっぽを向く。

知らん振りを決め込むらしい。

「ミクリの？」

「ああ。知識はあるくせに、生まれたてだからな。初めて見るもの全部、興味深いんだ。俺の制止も聞かず、どんどんと森の奥に、な」

「知識はあるのに、生まれたて、ですか？」

「そういう種族だと理解しておけばいい。ちなみにミクリはまだ生まれて三年目だ」

「三年目！ まだ赤ちゃんみたいなものなんですね」

「誰が赤ちゃんじゃ、馬鹿者」

ようやくと喋ったミクリに思わずリーラが苦笑する。

楽しいひと時。

だが彼女はまだ知らない。

カルシアの苛烈さを。

それを知ることになるのは、かなり先のことになる。

閑話 末路

カルシア達が村を出てから二十数日が経っていた。
ニグアルは忌々しそうな表情で、街道を歩いている。

「くそっ！ どうしてこんなことに……」

——あの死神が来るまでは順調だったのだ！ 私の財産があいつのせいで！

最初にカルシアの実力を知った時は、小躍りしたくなったものだ。
高レベルな魔術師。

カルシアをうまく利用すればムオラどもを倒せる。
もし死神が死んでも、盗賊も無事ではすまない。

そこをたたく計画だったのが、結局死神一人で全滅させてしまった。
た。

そこまでは良かったのだ。

——なのに！

心の中だけでなく、口にだしても思いつく限りの罵詈雑言を、カルシアに対して浴びせていた。

「私が何年かけた計画だと思ってるんだ！ あのクソ野郎！」

ぶつぶつと傍目からみたら非常に危険な男に見られただろう。
だがうまい具合に誰ともすれ違わなかった。
その男に出会うまでは。

気がついたときには、一人の青年が街道の少し先に立っていて、

どれほどの距離も無い。

ニグアルが彼を見たとき、病気かと思った。

それほど顔が白かったのだ。

だが心配したのは一瞬だった。

青年がマントを羽織っているのを見て、カルシアを思い出したからだ。

無関係と分かっているつもりでも、つい忌々しく思ってしまう。

睨みながらすれ違おうとした時、声を掛けられた。

「ニグアルさんで合ってる？」

何気ない調子。だが背筋の凍るような声。

恐怖で動けなくなる。

否定したかったが、口が動かない。

「ニグアルさんで合ってるね」

質問ではなく断定。

「さてと、それじゃ審判を行いますか」

いつの間にやら、男のすぐ傍を竜が飛んでいる。

小さな真紅の竜。人の頭程度しかないような。

「わ、わたしはニグアルではない……」

やっとそれだけ言えた。

だが青年は聞こえていないように続ける。

「村人の一人から証言を得た。曰く、ニグアルは村の利益のため、

盗賊と組み一組の獣人の夫婦を殺傷した。同じく自白も死神カルシアに対して行った。証拠として、殺害された獣人夫婦の販売ルートが判明したと同時に、ニグアルの作った墓には何も存在しなかったことを確認済みである。よって判決はジャッジによる断罪とする」

終始、抑揚の無い言い方。

だがニグアルは全てを察していた。

「ば、ばかな……カルシアは私を見逃すと……」

「あの人が重罪人との約束なんか、守るわけないでしょ」

マントの内側から鞘に納まった短剣を取り出しながら、呆れた声をだす。

「それにしても、君相当悪だね。確かに獣人はうまく売れたら、十年ぐらいの養育費なんて数分の一程度だもんね。リーナ、だっけ？ その子に何も教えなかったのは、そっちのが都合がいいからかな？」

ゆっくりと青年が一步を踏み出したため、一步下がる。

足が震えて、逃げ出したいのということを聞かない。

「カルシアさんが討伐した盗賊団と組んでたんだもん。性質悪いよね。しかも昔の事で脅されて、我慢できなくなって討伐隊？ それで大目に見てもらってたリーナ……やっぱり間違ってる気がするなあ。まあいいや、その子まで要求されるんだもん。自業自得だよね」

そう言う間も一步、一步と迫ってきて、その度の下がる。

青年が短剣を引き抜くと、薄い赤をした刀身が現われた。

「ひっ……」

思わず小さな悲鳴をあげる。

もはやニグアルの顔色は、目の前の青年よりも白い。

「しかもほとんど村ぐるみって言ってもいい犯罪だし。知らなかったのって若い連中だけなんでしょ？ 結局生き残ったの、十人いないんだもんな」

「お前ら、まさか……」

「ん？ あんたの村の連中はほとんど殺したけど？ ジャッジは使わなかったけどね。何しろ村が壊滅状態だからさ。結構時間かったよ、皆あちこちに移住始めてるし。あんたもその口でしょ？」

また一歩。

ニグアルもまた下がろうとしたが、つまずいて尻餅をついてしまった。

「……お喋りが過ぎたね。またカルシアさんに怒られるかな？ まあばれなきゃいいか。それじゃ、バイバイ」

短剣を素早く横に一閃し、ニグアルの首が落ちた。

「仕事完了」

軽い口調で青年は言い、短剣型のジャッジを鞘に納める。

「いや、それにしてもさすがカルシアさん。無茶苦茶な仕事頼むな。この程度でジャッジなんてさ」

独り言のように青年は続ける。

もしかしたら隣の竜に聞かせているのかもしれない。

短剣を再びマントの内側へと納めた。

「それにしても十日で全部調べて、全員殺せだなんてね。コロナちゃんカワイソ〜。でもしっかり仕事やっちゃったんだから、カルシアさんが信頼するのも分かるよね」

やはり竜に話しかけているようで、視線を竜に移した。

真紅の竜は頷くような動作をしたが、声は出さない。

出せない。

ミクリが特別なのだ。

「まあ、十日ちょっとだけ過ぎたけど大丈夫だよね。多分……」

青年は初めて僅かな恐怖の色を浮かべた。

閑話 末路（後書き）

少々長くなりましたが、これにて序章は終了です

一章はプロットが出来次第、書き始めます

お気に入り登録や評価をしていただけると、作者が歡喜いたしますのでよろしくお願いします

01 剣術修行

「大丈夫、大丈夫……」

リーラは目を瞑り、しっかりと自分に言い聞かせ、カルシアに買ってもらったばかりの細身の剣を、しっかりと握り、構える。

安物と言っていたので、剣としての能力には欠けるものの、練習用としては十分だった。

——教えられた通りにやれば大丈夫……

目を開けると、目の前に美しい少女が立っている。

リーラと比較しても全く遜色が無い。

紅玉のような澄んだ緋色の目と、頭の後ろで結んだサラサラの深紅の髪。身長はリーラと同程度。

どこを取っても美しいという形容が相応しい。

リーラはこれほど美しい少女を今までに見たことが無かった。

それが例え、不敵な笑みを浮かべていたとしても。

それが例え、漆黒の刀を向けていたとしても。

リーラが目を開けるのを待っていたかのように、少女が口を開く。

「そろそろ行くぞ」

「はい」

リーラが緊張した声で答えると、少女が構え直し、次の瞬間にはその姿が大きくなる。

無駄が一切省かれた動きで突っ込んできたのだ。

だがリーラにそこまで理解する余裕は無い。

突然姿が大きくなったようにしか見えなかった。

少女が横なぎに刀を振るい、黒い軌跡を描きながら襲い掛かる。

辛うじて剣を立て、防ぐ。

重さはほとんど無い。

うまく受けられたことにほっとしたのも束の間、すぐに上からの斬撃。

慌てて受ける。

キン。

鋼同士のぶつかる高い音が響いた。

——冷静に……練習通りに……

自分に言い聞かせるが、まともな思考にならない。

だが練習通りには動いていた。

彼女の努力の賜物である。

少女が袈裟切りに斬りかかってくる。弾く。

すぐに次の攻撃。また、防ぐ。

少女は防御されるたびに、少し顔を顰める。

いかにも腕力の無さそうな少女だ、実際動きは速いものの、威力が全く乗っていない。威力があれば、リーラの剣などとつくに弾かれていただろう。

一撃一撃を確実に防ぐ。

徐々に少女の速度にも慣れ始め、余裕が出始めたそのとき、

「もう少し早くするぞ」

と声を掛けられた。

——まだ速くなるの?!

正直勘弁して欲しかったが、口に出すより先に、少女の剣速の方が早くなった。

ほんのわずかだけ。

だがリーラには倍の速度にすら感じられる。

何とか受けているものの、いつ斬られるか気が気じゃない。

「足を使わんか」

少女の声でようやく最初の位置から動いていないことに気がついた。

上から来た攻撃を避け、そのまま少女の側面をつけるよう、移動する。

だが少女の速度の方が圧倒的に、速い。

まるで避けられることも計算済みだったような、体勢の立て直し。

すぐに体を振り向かせざま、横なぎに振るってくる。

「きゃっ！」

おもわず目を瞑り、小さな悲鳴を上げたが、何とか防御した。

また高い金属音が響くが、重々しい音はしない。軽くぶつかったような、そんな音が何度も続いていた。

「目を瞑るな！」

少女から叱責が飛ぶ。

その声に反応して、慌てて目を開けた。

少女が再び目に映る。少し距離を取り、刀を下ろしている。不敵な笑みは消え、まじめな表情をしている。

「戦いの最中に目を瞑ってどうするつもりじゃ！」

「ご、ごめんなさい！」

思わず首を竦める。

初めての実戦形式の訓練。

少女もそのことは分かっているのだが、怒らずにいられないミスだったのだ。

「戦いの最中に目を瞑るなど、言語道断！ その間に斬られたらどうやって防御するつもりじゃ！ ボケ！ そんなことがあっても、相手をしっかりその目を見開いてよく見とけ！ たわけが！」

リーラは身を縮めるしかない。

全くもってその通りである。

今は訓練なので攻撃されなかった。それだけのこと。実践であれば斬られるのが分かりきっている。

リーラをじっと見ていた少女だったが、ふうと呆れたようなため息を吐く。

次の瞬間には再び不敵な笑みを浮かべ、刀を構えなおしていた。

「説教はこの程度にして、続けるぞ」

「は、はい！」

力いっぱい答え、リーラも構えなおした。

今度は目を瞑らないよう、しっかり気構える。

せつかく相手をしてもらっているのに、あまり情けないところを見られたくも無い。

「今度はお主から来ると良い」

「はい！」

返事と同時に少女へ突っ込む。

「たぁ！」

気合の声と共に、上から斬る。

斬るというより、叩くという表現の方が正しいような、ぎこちない動作。

避けようと思えば、少女にとって容易い。

だがあえて受けた。

リーラは手に強い反動を感じた。

少女が顔を顰める。同じように反動を感じたのだろう。

きつと自分も同じような表情をしているのだろう。

だが怯んでいられない。

また怒られる。

すぐに逆袈裟切りに斬る。

少女は今度は受け止めず、後ろに下がることで避ける。

白銀で描かれた弧をやり過ぎた少女は、前に出る。

リーラは剣をあげたままのうえ、避けられたため勢いに負け、体勢を崩している。

とっさに足を使うことを思い出した。

何とか後ろに飛ぶ。だがとても避けられるようなものでもない。

少女が追いかけてくる。

そのまま大きく刀を横なぎに振るう。

漆黒の弧がリーラを襲おうと、迫ってくる。

——防御が間に合わない。

そう思ったと同時に、リーラと少女がそれぞれの方向に、吹き飛んだ。

二転三転と転がったが、草が生えていたため、大して痛くは無い。

ハッと自分がやらかしたことに気付き、慌てて少女の方を見る。
彼女は自分と同じく起き上がるところだった。

頭でも打ったのか、片手で後頭部を抑えている。

「——っ！ 馬鹿者！ さっきよりなお悪いわ！」

涙目になりながら怒鳴る。

「剣の訓練だと言っとるだろうが！」

「ごめんなさい！」

平謝りするしかない。

立ち上がり、ペコペコと頭を下げる。

「まったく……」

ふうっとため息を吐かれた。

呆れられている……

「今日はもう終わるかの……」

「はい……」

自分のせいなのだから、もはや頷くしかない。

多少気落ちしながら、今日宿泊する近くの村に、並んで戻る。

「それにしても、あれじゃの。お主、腕上げたの」

「カルシアさんの指導がいいですから」

少し微笑みながら答える。

「まあ教えるのはうまいからの、あやつは」

「やっぱり実力あると教えるのも上手いですよね」

「いや、そういうわけでもないじゃろうが」

「……ミクリも相当強いですよね？」

隣の美少女、ミクリに向かって少し恨みを込めて言う。

以前弱いと言っていたのは全くの嘘っぱちだった。

対してミクリは全く悪びれず、

「人の姿の時はの」

などと答えた。

彼女の様子を見て、思わず天を仰ぐ。

雲の無い、綺麗な青空が目映る。

「……この十日、いろんなことを教えてもらいました」

「まだまだお主の知らんことは多いぞ」

ミクリがにやりと笑う。

「はい。とっても楽しみです」

ミクリに笑みを投げかける。

本当に楽しみなことだった。

だが……

少しだけ、不安になり、思わず顔が少しだけ曇る。

ミクリはその表情を見て、小首を傾げる。

「……カルシアさんはなぜ別行動しよう、なんてことを言ったんでしょうか？」

ああ、とミクリが頷き、次に苦笑した。

「あれはよくあることじゃ。特に弟子を取った時にはの」

「私が弟子、ですか？」

ちよつと驚いた。

自分の感覚では弟子というより、付き人だったからだ。

なんでもないようにミクリは続ける。

「そう、弟子じゃ。そしてあやつは弟子にはかなり厳しい。それこそ千尋の谷に突き落とすような、な」

ミクリが体をぶるつと震わせて、両手で二の腕をさすった。

何か嫌なことでも思い出したのだろうか。

表情が少しだけ、こわばっている。

「まあ、そういうことじゃ。あまり気にしなくて良い。それよりどんな目に遭うか、覚悟だけはしといた方がいいの……」

語尾が弱い。

まるで自分に言い聞かせているようで、少しおかしかった。

一応ミクリに頷く。

カルシアの居ない、初めての旅。

その提案がなされたのは、今日のことだった……

02 知識と魔法

この十日で様々なことを教えてもらった。

とは言っても、身近なものの知識についてが主だ。

例えば、マクル草で作った睡眠薬。

今思えば、マクル草だけ持って行ったことが恥ずかしい。ムロウスの種もあんな扱いして、あとから背筋が凍る思いをした。

そういう知識は森の近くに住んでいるなら、知っているべき知識だったらしい。

子供がへたに口に含んだりしたら大変だから。

顔から火が出る思いで、教えてくれなかった両親をほんの少しだけ恨んだ。本当に少しだけ。

魔法や剣術についても教えてもらっている。

守るための力が欲しいから。

剣はあいにく一本しかないため、リーラは持たせてもらえない。

代わりに木の棒を使い、型だけ真似ていた。

まずカルシアがゆっくりと斬る動作を見せ、それを真似る。

防御も同じように。

リーラのためか、カルシアはよく休憩を取るので、その時に何度も棒を振る。

おかげで掌には血豆ができているが、リーラは気にしていない。

とにかく繰り返し練習する。

カルシアはその間、型を間違えないように近くで見えてくれた。明らかにおかしい時は後ろから回って、手を添え矯正する。

本当に寝る間も惜しんで練習したため、疲れてヘトヘトになるのが当然だったはずだが、カルシアが何かしたらしく、ほとんど疲れは無かった。

魔法についても教えてもらった。

魔法は魔力がなければ使うことができない。

それぐらいの初歩はリーラも知っていた。だが世の中には魔力の無い者の方が少なく、大抵は教えてもらえれば使用できるというのは初耳だった。

「魔法は自分の中の魔力を理解することで使うことができる」というのがカルシアの言いようだったが、リーラにはよく分からない。

だが今は理解できなくていいから、とにかく覚えておけと念を押された。

そして実際に魔法を教えてもらうとき。

カルシアが後ろから回り、リーラの両手首を掴み、前に突き出させる。

剣術を教えてもらうより前の話で、男の人とこれほど密着した事が無いリーラは、少しどきまぎしながらも、カルシアの言葉に耳を傾けていた。

「いいか。今からお前の中の魔力を、俺の魔力で無理矢理に操作する。お前は自分の中の魔力の動きをしっかりと感じていろ」

そう言われたが、感じろといわれてもさっぱり分からない。

次の瞬間までは。

カルシアの掌が温かくなると同時に、自分の中の何かがうごめいた。

体の中心から何かが湧き上がってくるのを感じ、それが掌に向かって真っ直ぐに伸びていく。

掌に何かが集まる。

何かよく分からないが、気持ちの悪いものではない。むしろ心地良い何か。

これが魔力なのだろうと思った。これを理解する、というのはやはり分からないものの。

掌に集まっていた魔力が掌を離れ、目の前に集まり、小さな光の塊になった。

「すごい……」

わずか小さな光の塊。

だが自分の魔力でだしたことに感動していた。カルシアと密着しているための緊張などどこかに吹き飛んだ。

少しだけ、自分の意識で力を増してみると、光が少し大きくなったことに、また感動した。

「今、光の塊になっているのは、俺が操作しているからに過ぎない」「はい」

返事をする、とたんに光の塊が消え、自分の中から魔力が消えた感じがした。

「光にしたのは魔力を目で確認しやすいからだ。次が魔力を操るうえでの基本になる」

「はい」

「目を瞑って、しっかり自分の中の魔力を感じろよ」

言われた通りに目を瞑り、魔力そのものに意識を集中する。

光の塊をだしたことで、魔力を感じることはできるようになっていた。

自分の奥深くで眠っているように、静かな魔力。

それがゆつくりと目覚め、全身を包むように広がる。

肉体に魔力が充実し、心地よい。

全身を覆っていた魔力が、掌に集まり始める。

すでに光を生み出した時の魔力の量を超えていく。

突然、堰を切ったように魔力そのものが前方へ流れ出て、驚きのあまり目を開いた。

サアツとまるで風が吹いたように、草が靡く。

「魔力をせき止め、放出する技術だ。これを応用すると衝撃波になり、人を飛ばす程度の威力になる」

リーラは嘆息する。

魔力の操作。

カルシアに手伝ってもらったとはいえ、自分でやったことに驚いていた。

カルシアが両手を離れたとき、ぱつと振り返ると、カルシアが多少仰け反った。

「……一人でやってみるんで、見ててもらってもいいですか？」

「あ、ああ。やってみろ」

カルシアが勢いに押されたように答える。

キツと再び正面に向き直り、両手を前に突き出すと、両目を再び瞑る。

集中。

自分の中から魔力を引き出す。

カルシアの手伝いが無い今、ひねり出す、と言った方がいいかもしれない。

魔力が全身に広がり、心地よさが広がる。

掌へとそれを収束させていくが、魔力の動きがぎこちない。

掌に収束しきった魔力をさらに強くしていく。

十分強まりきったとき、それを一気に解放した。

「キャッ！」

リーラが後方に吹っ飛ばされたが、カルシアが両肩を抑えてくれたため、数歩下がった程度で済んだ。

「ご、ごめんなさい」

慌てて離れると、カルシアに頭を下げる。

恐る恐るカルシアの顔を見ると、険しい表情をしていた。

カルシアの表情は実は分かりにくい。本人がどう思っているのかは知らないが。

少なくとも、リーラから見たカルシアの笑みは、口の端が少し上がるだけで、判断がしにくいのだ。

ついでに言うとかルシアの笑みは作り物めいていて、どうにも怖い印象を与える。

それはともかく、今のカルシアは眉根を寄せ、はっきりと表情を作っていた。

「あの……」

「いや、何でも無い」

何でも無いということはない気がしたが、口にはしなかった。

ただしこの十日間、魔法の修行をする時だけは、カルシアが特に注意していた、という気はしている。

魔法や剣術の他にも知識として少し教えてもらった。

教会についてはほとんど教えてもらっていない。

まだ早いとか。

代わりに今、カルシアの横を飛んでいる小さな竜について教えてもらった。

メモリードラゴン。

それがミクリの竜としての種族名。

記憶と記録を司る竜。

見たものの全てを覚え、記憶を他人に見せることもでき、凶器に触れれば二十四時間以内にその凶器が殺した人物を視る事ができる。

メモリードラゴンの蓄えた記憶は、十二分に証言能力を備えており、だからこそ死神の補佐役として勤めている。

死神は人を殺すことが仕事なので、死神の集めた証拠、実行を確実に見届け、本部に報告する義務がメモリードラゴンには課せられている。

とはいうものの、本当に重要な仕事はこれらではない。

メモリードラゴンの本当の役目。

それは死神の「ジャッジ」使用の監視。

死神専用武器であるジャッジは大きな使用制限がある。

第一に証言、第二に証拠、第三に犯人の自白が必要となり、これらを揃える必要がある。自白だけではできれば欲しい程度だが、他二つは必須である。

証言を誰から得たか、証拠は何か。

メモリードラゴンの前で宣言してからしかジャッジは抜いてはならない。なおかつ、どちらもメモリードラゴンに見せていなければ

ならない、という制約のおまけつきだ。

証拠にかぎれば、相手の武器を触り、何人殺害したか確認するということもできる。

ただし武器が殺した者しかわからず、別の持ち主が殺した可能性はありうるため、有力な証拠とまではいかない。

この場合は状況証拠と合わせることで、有力な証拠として昇格する。

カルシアが盗賊団を相手取った時などは、この場合に当てはまる。また、カルシアがムオウを斬る前にした審判こそが、ジャッジを抜くための儀式にあたる。

審判をせずにジャッジを抜くことができないわけではない。

だが後から発覚した場合、教会の規則により死刑となるので、実質的にできないといえる。

常に肌身離さずという命令も出ているらしく、ジャッジを下ろすこともあまり許されないらしい。カルシアはわざと脅迫されたという名目を利用して、時々手放すらしいが。

ジャッジは重罪人用の武器なのである。

そのため死神は複数の武器を所持するのが普通らしい。なのでカルシアは右腰に刀を差しているらしいが……

「カルシアさん、ちょっと訊いてもいいですか？」

「どうした？」

「カルシアさんっていくつ武器持ってるんですか？」

次の街へと向かっていたカルシアの足がピタッと止まった。

あわせてリーラも止まる。

「……よく分かったな」

「え？　だって後ろから見てたらよく分かりますよ。腰のところに何か、棒みたいなのがあるって」

「そうなのか？」

カルシアが再び歩き出したので、リーラも足を動かす。

「全部で三本だな。ジャッジと刀と小剣」

「そんなに」

「俺の場合は、もっと違うものを使うが――」

そこで言葉を気切り、目を僅かに細めた。

どうしたのだろうかと思い、リーラも視線の先へ目をやると――

「村ですね。私の村以外のところって初めて来ました」

胸が高まるのを感じた。

全く知らない新しい村。

「あそこが目的地ですか？」

カルシアが首を横に振る。

「いや。だが休むのには適しているな。今日はあの村で休むか」

「はい！」

それが昼頃の二人の会話だった。

03 小さな村にて

カルシアは村唯一の宿屋を借りると、部屋で休むことなく、すぐにそこを出た。

待っててもいいと言われたのだが、今のリーラはもはや好奇心の塊で、留守番なんてするつもりはなかった。

「どこに行くんですか？」

前を歩くカルシアに尋ねる。

キヨロキヨロと周りを興味深く見て回っているので、少し遅れるのだ。

そんなリーラにちよいちよいとカルシアが手招きした。

小走りで横に並ぶ。

「この村は教会の保護下にあつてな。そういう村の飛脚屋には、教会からの指令が届いてることが多いんだ。他にも教会にジャッジを抜いた報告をしないといけない。だから今回はその確認と報告だな」
「へえ。そうなんですか」

リーラの住んでいた村にはそんなものは無かったと思う。確信は持てないにしても、教会との関係は強固ではなかった気がした。

「でも記憶石っていうのが無いと、報告しても意味無いんじゃないですか？」

報告したところで、ミクリの記憶が無いと真偽が分からないはず。記憶石というものにメモリードラゴンの記憶を写し、魔力を込めた手で触ると他の人にも見ることができると聞いた。

見せてもらおうと訊いたところ、カルシアの返事は「今は持っていない」と言っていたはずだ。

「それも飛脚屋においてあるんだ。三つぐらいな。つと、あそこだな」

小さな村だ。すぐに小さな建物につき、外で待っているよう言われた。

記憶石を見たかったので、少しせがったがあっさりと駄目だと言われてしまった。

教会からの指令の中には、人に見られたらまずいものもあるらしい。

仕方なく、建物の外で佇み、出てくるのを待つ。

……長閑だった。

ぽかぽかと陽気が気持ちいい。

——自分の村よりも少し静かな？ 人はこっちの方が多いけど。周囲を見ながら、いろいろと自分の村と比べていく。

往来はこっちの方が少ない。

けど若い人は多いかな。

そうやって観察で時間を潰していたが、さすがに飽きた頃、ようやくカルシアとミクリが出てきた。

かなり長い間入っていたと思う。

カルシアがほんの少しだけ、難しい顔をしていた。

何かあったのだろうか？

ちよつと聞いてみたい気もしたが、考え事をしているようなので、声をかけることは気が咎めた。

代わりに「行くぞ」とカルシアに声を掛けられ、先にスタスタと歩く彼を走って追いかけた。

しばらくそのまま後ろを歩いていたのだが、ふと疑問に思った。

「カルシアさん、どこに行くんですか？」

どうにも宿の方向ではないのだ。

「ちよつと二カ所ほどまわるぞ」

「はあ」

何でもないように言うカルシアだった。

ミクリをちらりと見ると、この竜も分からないようで、小首を傾げるような動作をしている。

ミクリは普段はあまり喋らない。

何故か聞いたところ、人とは声帯がかなり違うので、声を出すの

は意外にしんどいのだとか。それでも喋る時はよく喋っている気がする。

目の前を歩くカルシアは、キョロキョロと辺りを見回し、何かを探している。

彼もこの村に詳しいわけではないらしい。適当にブラブラしているようにすら見える。

そのうちに目的のものを見つけたようで、一つの建物に入っていた。

今度は待っているとわれなかつたので、リーラも続いて入る。

「武器屋ですか？」

訊くまでも無いきがしたが、思わず口からでた。カルシアが少しだけ頷く。

四方の壁に剣が飾られ、中に入る人を威圧しているようだった。

「教会運営の武器屋だ。村で運営するのは珍しいんだが、運がよかったな」

カルシアが樽に何本も無造作に入れられた剣を一本取る。普通の剣よりも幾分か、短めだ。

鞘に入れられた剣を抜いて確かめ、

「まあ、これでいいだろ」

そう一人ごちると、本を読んでいた店主の前まで剣を持って行った。

少ししてすぐに戻ってくる。

「もう出るぞ」

「もうですか？」

入ってからごく僅かな時間だった。

聞き返す間にもカルシアはさっさと出て行ってしまい、慌てて後を追う。

店を出ると次の場所へと歩み始めていたカルシアの隣まで走る。

「もう一本持つんですか？」

三本も持っているのに、と疑問を口にする。

すると思わぬ答えが返ってきた。

「これはお前のだ」

「私の？」

「そうだ。練習用に必要だろ？」

「は、はい！」

思ってもよらぬことで、目頭が熱くなる。

剣を貰って喜ぶのもどうかと思うが、嬉しいものは嬉しいのだ。

「所詮練習用だからな。適当に選んだが、俺が認めるぐらい上達したら、もっと上質な剣をやるよ」

「はい！ きっと認められる実力をつけてみせます！」

はち切れんばかり声を聞いて、カルシアは少し微笑んだようだった。いつもの、作り物のような笑みだったが。

次の目的地にはすぐに着いた。衣服屋だった。

新しい服でも買うのかと思いつながら、着いていく。

カルシアは真っ直ぐに店の主人のところまで行き、話しかけた。

「この子に合う大きさの、男物の服が欲しいんだが。旅に適している服を頼む」

隣までやってきたリーラの頭に手を置く。

「男物ですか？ はい、かしこまりました」

主人は不思議そうに首を傾けたが、お客の注文を取るべく動き出した。

店に飾っている服をすぐさま選び、カルシアの前まで持ってくる。

「これでよろしいでしょうか？」

カルシアの前で広げてみせる。

「ああ。それでいい」

代金を払うと、すぐに店を出て宿屋に向かった。

リーラはまた貰えるのだろうか、胸をドキドキさせながら。すでに腰に佩いた剣に思わず触れる。

「言っておくが、この服はお前のじゃないからな」

リーラの考えなど見透かしたように、歩きながら宣言されてしまった。

だが同時に疑問が起こる。

それじゃ誰に？

「まさかお主……」

ミクリが嫌そうな声をあげる。

カルシアは何の反応もなく、宿屋へと向かった。どことなく無然とした表情のミクリを従えて。

宿屋に戻ったリーラ達だったが、一度部屋に入るとミクリと荷物を置いたまま、すぐに部屋を出た。

宿屋は二階立ての建物であり、宿泊のための部屋は二階。

一階は食堂になっていて、一つの丸いテーブルにつく。

「あの、ミクリはいいんですか？」

「すぐに来る」

「でも、ミクリって扉も開けられないのでは？」

「そんなことはない」

「そうですか……」

自分の知らない能力があるのかもしれない、とりあえず納得しておく。

飲み物だけ注文し、無言のまま数分の時が流れる。

二階のほうからトットトツ、と軽やかなリズムを刻みながら、一人の少女が降りてきた。

リーラは少女を見る。

綺麗な緋色の瞳と目が合った。サラサラの深紅の髪を頭の後ろで結びながら、真っ直ぐこちらへ向かってくる。

——きれいな人だな。

知らず知らずため息が漏れる。だが何故か男装していて妙に思ったが、それでも綺麗なことに変わりはない。

少女は近くまで来ると、リーラ達と同じテーブルについた。

カルシアは何も言わない。

「あの……何かご用ですか？」

カルシアが何も言わないなら問題無いのだろうけれど、一応声を掛けてみる。

すると深紅の少女はキョトンとした目をこちらに向け、喉の奥でクッククツクツと笑う。

「あの……？」

怪訝に思い訊いてみる。

ちらりとカルシアの顔を見ると――笑っていた。いつもの作り物の笑みで無く、自然な笑みで。

「この姿で会うのは初めてじゃったな」

「――っ！ その声！」

「ミクリじゃよ。ワシは」

可笑しそうに笑う。

「でも、その姿……」

「人にもなれるんじゃない。人の声を出せる者はの」
驚いてまともに口が動かない。

「まあ、そういう事だ」

カルシアがようやく口を開く。笑みはもう消えていた。

「ミクリは人の姿の方が疲れると言って、あまりなりたがらないんだがな」

「おう、なりたくないぞ。喋りやすいがの」

「今回はそうも言ってられない」

「……どう言う事ですか？」

リーラはカルシアの言い様に、どこことなく不吉なものを感じた。

「これから別行動を取る」

「やりの……」

「えーっ！」

ミクリは諦めたような声だったが、リーラは驚きのあまり、外にまで聞こえるような大声を出してしまった。

幸いにも店内に誰もおらず、覗きに来るものもいなかった。

「な、何ですか？ 何で別行動？」

矢継ぎ早に聞く。

カルシアは今の保護者だ。保護者と完全に離れて行動するという
ことに、驚きと不安を隠せないでいた。

「お前の修行のためだ」

カルシアはあっさりと言い捨てる。

「私の修行？」

「ああ。精神面の修行だ。それには俺が同行していると少々まずい」
「よく言うの……」

ミクリの小さな非難は二人の耳に届かなかった。

「でも、他の修行が……ただでさえ、私、覚えが悪いのに……」

「安心しろ。剣の修行はミクリが引き継ぐ」

「何じゃと？」

「ミクリは竜身なら確かにリーラより弱い。だが人身ならリーラより遥か上の剣術を持っている」

ミクリの声など聞こえていないようである。

「本当ですか？」

代わりにリーラがまじまじとミクリを見た。

信じられないといったふうには。

それも当然である。

身長は自分とほとんど変わらず、体は華奢とすら言え、力が無さ
そう。唯一胸が幾分大きい、それは関係無いだろう。

「それで魔法についてだが、そちらはリーラには魔法制限を課す
しょうか」

「魔法の使用制限ですか？」

リーラは思わず聞き返した。

「そうだ。お前はまだまだうまく魔法を使えていない。それで使う
のは危険だから。俺がいいというまで、むやみやたらと使うな」

「はい、分かりました……」

少々落ち込み気味の返事。

口ではそう言ったが、頭の中が真っ白になる。

確かに自分でもまだまだ魔法がうまく使えていない。

だからといって魔法の使用制限……

様々なことが頭の中をぐるぐるし、しばらくぼーっとしていたよう
うで、突然カルシアから声を掛けられた。

「リーラ、聞いているか？」

「あ、は、はい」

「俺が何て言ったか、聞いていたか？」

「はい、えーっと……魔法の使用を制限するって」

「それは随分前の話した。聞いてなかったのか？」

「えっと……はい、ごめんなさい……」

「まったく」

カルシアが頭を掻き耷る。

「魔法制限が随分とショックだったみたいじゃの？」

「はい……」

カルシアがため息を漏らす。

「別にお前の才能が無いから制限するわけじゃない。危険だからだ。
聞いていたか？ 危険だからだ」

二回目は強く、ゆっくりと諭すように言った。

「リーラは魔法に関しては全く問題は無い。だが今は操る術を見に
つけていない。分かるな？」

「……はい」

あれから何度も魔法の練習はした。基本である魔力を飛ばす術だ。
だがやる度に体が後ろに吹き飛んでしまい、毎回のように体を支
えられていた。

ようやく頭が冷えてきて、カルシアの言っている意味がよく分か
る。

「それと魔法の訓練だが、今のお前なら全身に魔法を行き渡らせる
だけでも十分だ。わかったな？」

「はい」

「よし。それじゃもう一度分かれてからの行動を説明するぞ。今度
はしっかり聞いておけよ?」

「はいっ」

意識してしっかりした声を出す。

また聞いてなかったなどと、言っていられない。

「それじゃ復習を兼ねて、ミクリが説明」

「ワシか?」

急に振られたミクリは多少驚いていたが、しっかりと説明を始める。

「カルシアはすぐにこの村を出て、今日中にロトゥールに着くよう
目指す。その後ワシらは明日から三日以内につくよう出発。その間
はこの村で待機。街に着いたら北門に近いカナリアという宿で一月
過ごす」

「一月も?」

驚いて聞きなおしてしまった。

「正確には最長で一月じゃな。もっと短くなることもありうる。宿
についたら一週間以内にリーラが目立つように魔法を使うこと」

「え? 魔法の使用制限は?」

「何事にも例外はある」

カルシアが言い、目でミクリに続きを促す。

「他にはカルシアが許可するまで他人の振りをすること。ワシがリ
ーラにしっかりと知識を付けさせること。竜になることの禁止。最
後まで生きていること。それぐらいかの」

「最後まで生きていることって……危険なんですか?」

「さて、どうかな? 今の時点だと何とも言えないが、多分危険に
なるかもしれないな」

「そんな……」

顔が青くなるのを感じた。

「まあ心配するな。ミクリの腕は保証する」

立ち上がりながら作り物めいた笑みを見せる。

「俺はもう行く。金はこれを使えばいい」

差し出された小さな袋を受け取ると、ずしりと見た目に相違して重さを感じた。

「ミクリにはこれを」

腰につけた刀を外し、ミクリに渡す。

「それ渡したら、カルシアさんが困るんじゃないですか？」

「問題ない。それじゃあまたな」

ボロボロのマントを翻し、後ろ向きに手をヒラヒラと振って、店を出て行った。

後には不安そうなりーラと、口笛でも吹きそうな表情をしたミクリが残されていた。

「……いいんですか？」

「あいつには本当に問題無いの。それより、実践訓練でも今からやるかの。今日一日は時間潰さんとならんし」

「はぁ、そうですね」

「それでは行くかの」

ミクリが立ち上がり、先に行く。

リーラは内心不安だった。強いとは聞いたが、見た目は全く強そうではない。

だからといって追いかけないわけには行かず、ミクリの後を追ってリーラも店を出た。

04 ロトウール（前書き）

お気に入り登録、評価をつけていただけたら幸いです

04 ロトウール

カルシアに二日遅れてリーラとミクリの二人は、昼頃に大都市口トウールにやってきた。

次の日にはあの村を出たのだが、予想外に遠く、一日野宿をしてからの到着だった。

この距離でもカルシアなら、問題なく当日についているとミクリが保証する。

「わぁ……」

街に入るための門をくぐったリーラは、思わず感嘆の声をあげた。門をくぐるとそこは馬車が十台ぐらい並んで通っても、まだ余裕のありそうな通りが広がっていた。

真っ直ぐに街の中央へと伸びる大通り。

ずらっと商人達が通りの左右に露店を出していた。

先の方まで人で溢れかえっており、これほどの人を一度に見たことが無い。

ミクリは隣でクスクス笑っている。

「ここは門に近いからの、人の往来が激しい。それだけ人も多いの」

「へえ」

うまく言葉が見つからない。

人、人、人。

人ばかり。

世の中にこれほど人がいるとは思わなかった。

「なんて顔しとるんじゃ。ほれ、とっとと北門に行くぞ」

「あ、はい」

ようやく我に帰る。

入ってきた門は西門なので、少し歩かなければならない。

先を歩くミクリに小走りで近づき、並ぶ。

「あの、ミクリ」

「どうしたんじゃ？」

「なんか、皆がこっちを見てる気がするんだけど……」
僅かに歩いただけだったが、すれ違う人のほとんどがこちらを見ている気がする。

「そりゃそうじゃろ。こんな美少女二人が男装して旅をしとるんじや。目立って当然」

「そうなんですか？」

自分が美少女かどうかはともかく、ミクリは間違いなく美少女だと思う。

だから彼女を見るならまだ分かるのだが……

分かってなさそうなりーラの様子に、ミクリは呆れ顔で説明する。
「女の旅っていうのはお主の考えているよりも、かなり危険なんじや。盗賊に襲って下さいと言うようなもの」

盗賊と聞いてサツと顔が青くなっただが、ミクリはちらりと横目で見ただけで、気にした様子も無い。

危険性を分からせるための、彼女なりの教育だった。

「男装をしているというのは、この街ではあまり目立つ方では無いがな、ロトウールには旅人が集まるからの。男も女も男装しておるのが多い。獣人も他の街よりは集まるが、やはり目立つ。剣を佩いている姿も目立つ。目立つところばっかりじゃ」

「なるほど……」

リーラは少し青ざめた顔で関心すると同時に、疑問にも思っていた。

少しだけ並んで歩いたあと、疑問を口にする。

「ミクリってまだ生まれてから三年目ですよ？ 何でそんなに詳しいんですか？」

「ん？ カルシアに聞いたのではなかったのかの？」

「えっと……何を？」

「ふん。説明を忘れたようじゃの。ワシらは知識を親から子へと引き継がせるんじや。様々な知識と記憶じゃな。だからこの街のこと

も、よう知っておる」

カルシアはそんな説明はしなかった。

本当に忘れていたのだろう。

そうなんですか、と返事をしたあと、黙って街を見つつ歩く。

騒々しい街だった。耳が痛みそうだ。

でも活気に溢れている。

西門の近くは主に住宅街としての役割を持っていて、これが他の街なら静かであるのが常だった。

だがこの街では西と南の門がよく利用されるため、それだけに人通りも自然と多くなる。

彼らを狙った商人達も自然と集まるため、住宅街だというのに、露店があちこちに立ち並んでいた。

リーラは聞いたとおりだと感心しつつ、楽しんでいた。

全てミクリから聞いた知識だ。

彼女もまた興味深そうにキョロキョロと周りを見ていた。カルシアが言っていたが知識があることと、経験することは全く別物らしい。

時々、前から来る人とぶつかりそうになりながらも、しっかりと歩いていく。

「北門ってこっちにあるんですか？」

「今向かっておるのは中央広場じゃな。一番露店の多いところじゃ。今歩いとる広い道は西大通り。中央広場から北大通りに向かえば北門じゃ」

「真っ直ぐ向かった方が早くないですか？」

「他の道は入り組んでおってな、特に住宅街じゃとても道がわからん。市場街ならともかくの。だから一度中央広場に行くほうが速い」

ミクリはそう言ったが、本当にそうだろうかと少し思う。

いくらか歩いたが、中央広場などいっこうに見えてこないのだ。

かなり大きな街だとは聞いていたが、それほど大きいのだろうか。

その後も黙々と歩き、陽が街についた時より幾分傾いた頃、忙しなく行きかう人々が段々と増え始めてきた。

「いたっ」

誰かの肘がぶつかり、涙目になりながらも歩いていく。隣のミクリもぶつけられたらしく、腰の辺りをさすっていた。

「さっきまで少なかったのに……」

「仕方ないの。ほとんどはこの街の住人。ワシらと違って道を知っておるから、路地を回れるんじゃ。それにほら、もう中央広場じゃミクリが指差すと、確かに前方には開けた場所が見えた。

「あそこですか」

「ちよっと急ぐぞ」

ミクリが速度を上げた。

リーラはしっかりと離れないように、ミクリのすぐ後ろを歩く。人の波を抜けて、大通りを抜けた。

中央広場。

そこには様々な露店が、せっせとお客を獲得すべく、大声を張り上げていた。

「こっちは銅貨三枚だ!」

「ならこっちは二枚!」

「てめえ! 商売の邪魔すんじゃねえ!」

「お前が引け!」

何を売っているのか、あいにくごった返した人々で見えないが、向かい側からそんな罵声が聞こえた。

とにかく人と露店が多い。

広場自体はリーラの住んでいた村より少し狭い程度の広さ。けれどあちこちで出された露店のために、全然広い感じがしない。歩くことさえ困難な気がする。

広場の迫力に押されて立ちすくんでいると、腕を引っ張られた。ミクリだ。

「ボケッと道の真ん中で立つな。邪魔じゃろ」

引っ張られるままに広場を進んでいく。

露店同士の作る細い道を縫うように歩き、人とぶつかり、その度に謝りながらも、北大通りの入り口までは来られた。

何故かこの辺りは妙に人が少ない。

「ふぁー、びっくりしました」

「そうじゃの、ワシも少しびっくりした」

ミクリが笑顔で返す。

「それで、こっちが北大通りなんですか？」

「そうじゃ。カルシアに聞いたときから、ろくなことにならんとは思っておったが」

北大通りを睨むように見ている。

明らかにさっきまでの華やかな街と比べて、寂れている。建物自体が古いとか、壊れているということは一見無いようだが、どこことなく暗い。

陽が当たらないというわけでもない。

ただ、人が居ない。

さっきまで溢れかえっていた人だかりは、そこだけが別世界のよう
うに人だかりは見当たらない。

いや、人だかりどころか、人っ子一人見当たらない。

とても同じ街だとは思えない。

後ろを振り返ってみる。

人が大勢いた。

何人かが不安そうにこちらを見ている。

正面に向き直る。

誰も居ない。

「行くぞ」

ミクリが歩き出す。いつでも刀を抜けるよう、構えているように
見えた。

大通りはやはり酷く静かだった。

人の気配がしない。

不気味な雰囲気はただよい、思わずミクリの服の裾をつかんだ。
ミクリが振り返り、目が合う。

にやっと笑われ、慌てて手を離れた。
顔が赤くなるのを感じる。

「……結構大勢いるの」
とミクリ。

「え？ どこに？」

「建物の中とか、路地とか。こっそり見ておるな」

路地を見てみると、確かに人がいたような気がする。

視線をやったとたん、隠れられてしまって、リーラにははっきり
確認できなかった。

「ここってどういうところですか？」

どんどんと不安になってきて、とうとう聞いてみる。

「スラム街じゃよ。まったく、カルシアの好みそうなところじゃな」

「スラム街……？」

「まあ貧乏人の溜まり場じゃと思えばよい。奴らは荒れとるからの、
いつ襲われても不思議ではないの。ほら、こんなふう」

ミクリの言った通り、周囲から出てきた男達に囲まれてしまった。
全員がやせ細り、ボロボロの服を着ている。

男達ばかり、全部で十二人。

「何か用かの？」

彼女は一切の動揺が窺えない声で聞いた。

早くも一混乱ありそうだった。

05 スラム街

「有り金、置いていってもらおうか……」

やせ細った一人がボソボソとした声で言った。

「そうすりゃ乱暴はしねえ」

これはまた別の一人。白髪混じりの男だった。

囲んだ男達は徐々に迫ってくる。

「あんまりこういう意味で目立ちたく無いんじゃないの」

シャツと風を切る音と共に、漆黒の刀身をした刀を鞘から抜いた。

「女の子があんまり刃物を振り回すのは感心せん」

最初の痩せた男だ。

ミクリの怪しく光る刀を見て目を細めているが、怯えた様子は一切無かった。

男の言いように、ミクリが馬鹿にしたように鼻で笑った。

「ふん、こんな美少女捕まえて、十人以上で囲んで？ よくもまあ

そんな恥知らずを口にできるもんじゃの」

男達が表情を変えず、一斉に刃物を取り出した。短いナイフだ。

リーラも慌てて剣を抜く。

刃先が左右に大きく振れている。

――怖い。

ミクリとの練習ではないのだ。どうしても恐怖が先立ち、振るえが収まらない。

ミクリがこちらを横目で見た。

「やつが別行動を提案したのはそれが理由じゃな」

「……それって？」

声まで震えていた。

気丈に振舞おうとしても、どうしてもできないのだ。

「戦いの恐怖。お主はまだ感じたことが無いじゃろ？ そして恐怖を克服するにはやつ自身が邪魔になる。まあ他にも色々考えている

んじゃろうが」

「ごちゃごちゃ煩いやつらだな」
痩せた男の呆れた声。

リーラとミクリが黙り込む。

糸の張り詰めたような緊張の一瞬。

「殺れ」

沈黙が破られた。

いや、依然沈黙が続いている。ただし静かな暗闘が始まった。
声をあげるものはいない。

黙ったまま、リーラ達に襲い掛かる。

リーラはその瞬間に、自分と相手以外の何も見えなくなってしまう。
った。

目の前の一人だけ。

彼女に襲い掛かってきた一人。

ナイフが突き出される。

剣で払う。両手の汗で滑りそうになる。

相手は一瞬だけバランスを崩したが、すぐに建て直し、切りかかってくる。

ナイフは動きが速い。

リーラは体を大きく右に動かし避けた。

だが突き出されたナイフが、そのまま首めがけて襲ってくる。

「——っ！」

悲鳴がでそうになったが、声が出ない。

慌てて体を後ろに引く。

ギリギリ目の前をサッとナイフの刃先が通り過ぎた。

大きく息を吐く。

いつの間にか呼吸が止まっていた。

左の頬からつうつと熱いものが流れる。

かすっただけだが、リーラは体の芯まで凍りつくようで、体が固まる。

一方で酷く冷静に頭の中が動き始めた。

さっきまで何も考えられなかったのが嘘のように。

再びナイフが突き出される。

腰を屈めて避け、そのまま男の胸の中に力いっぱい飛び込んだ。

自分でこれほどの力があつたことに、頭の片隅で驚いたが、すぐに目の前の事で頭がいっぱいになる。

男は勢いに押され、後ろへと吹き飛んだ。

倒れた男に馬乗りになる。

逆手で剣を持ち直し、男の喉に向けて切っ先を突き下ろす。

目に男の顔が映った。恐怖の表情を浮かべている。

死にたくない。

そう言っているようだった。

だがリーラは自分でも抑制の効かない何かが後押しし、剣を止めることができない。

「動くな！」

綺麗な声が響く。

とっさにピタッと剣が止まり、剣先が男の喉元で止まる。

自分の中の何かから解放された。

「はあ、はあ、はあ……」

とたんに荒い呼吸が起こる。

また呼吸が止まっていたらしい。

「勝負はついた。全員引かせろ」

凜とした声。

ようやく周りを見る余裕ができて、あたりを見回す。

ミクリがあつた痩せた男の首筋ギリギリに刀を突きつけていた。

少し腕を伸ばすだけで、首を貫けるだろう。

他の男達はあちこちから血を流しているが、全員しっかり立っていた。

死んでいる者はいない。倒れている者さえ、リーラが相手をしていた男一人だった。

「引くな？」

ミクリが再び詰問する。

痩せた男がゴクリと喉を鳴らし、ゆっくりと頷いた。

それを見た仲間の男達がサツと様々な路地へとバラけて行く。

ミクリと目が合い、頷くと剣を引き、体をどける。

今まで下敷きなり、剣を突きつけられていた男は、慌てて仲間達の後を追った。

痩せた男の仲間達が全員消え、大きく息を吐き出した。

ようやく体の緊張が解けていく。

思わず出たため息だったが、彼女はそれがどこから来るものだったか、気がついていなかった。

「もういいだろ。早くそれを下ろしてくれ」

男が嘆く。

「お主らの目的は？」

「金だ。断じてそれ以上は求める気は無かった。誓うぜ」

「誓われてもの。まあいい、行ってよい」

ようやくミクリが刀を首筋から放した。

すぐさま痩せた男も姿を消す。

「お主も一人倒せたようじゃの」

刀を納めながら、話しかけてくる。

「はい」

剣を握ったままなのを思い出し、同じように鞘へ納める。

「相手が素人じゃったから今回は一人任せだが、訓練した相手だところはいかんぞ。覚えておけ」

「はい」

神妙に頷く。

確かにさっき戦った相手は大した相手ではなかった。ただ、人を殺しなれてるような気がした。

一つ一つの動きが殺すことにためらいが無かった。

相手の表情と動きを思い出して、今更ながらぞっとする。

深く暗い瞳に、凍ったような表情。的確に急所を狙ってナイフが向かってくる。

「おー、酷い顔じゃのー」

目を開けてミクリが暢気な声を出す。

「怖かったか？」

「……はい」

「殺されるかもしれない、と？」

「はい」

「……それだけかの？」

「え？」

どういう意味だろうか？

それ以外に意味があるとも思えなかった。

「ま、それはまた今度話すとして、宿に行くかの」

「は、はい。でも、本当にこんなところで泊まるんですか？」

「仕方なからう？　そういう指示じゃからの」

歩き出したミクリの後姿を見て、ため息を吐き、トボトボとついていった。

大通りに面した、指定された宿屋に着いた時、目を疑った。

扉の上にかかれた店の名前は『宿』。

捻りも何もあったものじゃない。

その上、覚悟はしていたのだが、あまりにもぼろい。

ところどころ壁に穴が開き、今にも崩れそうな雰囲気をかもし出している。

——宿屋じゃなくてお化け屋敷かもしれない。

リーラは冗談でなくそう思った。

こっそりとミクリの顔を覗き見ると、引きつった笑みを浮かべていた。

「……ここまで酷いのは、久方ぶりじゃの……」
心なしか、声まで震えている気がする。

「……入るかの」

「え、本当に入るんですか？」

思わず言うと、じろっと睨まれた。

その目には諦念が混じっている気がした。

「……ここは嫌か？」

「えっと、はい。別のところに泊まりませんか？」

こわごわとだが、はっきりと拒否し、提案する。

ミクリが体をこちらに向けなおした。

「やつの指令は絶対じゃ。というより聞かなかったら、余計に酷い目に遭うことが多い」

目が怖い。

何か嫌なことがあったのだろうか。

思わずごくりと生唾を飲み込む。

「ど、どう、なるんですか？」

つかえながらも訊いてみる。

とたんにミクリの目が、遠い目になる。

「ワシが一番酷い目にあったのは、一昨年じゃったか。さすがに我慢できなくなつての、逆らったことがある。あの時の任務は反逆者の制圧じゃったか……指令通りなら一切の危険は無かった。逆らったせいで三日間、ずっと追い掛け回されたの。人の姿で刀も無く……竜の姿で逃げたかったが、赤ん坊を抱えとってな、比較的静かじやったが、時々は泣いた。その度に場所がばれるし、赤ん坊にはミルクをやららないといけないし……」

ぶるっとミクリの体が震えた。

聞いているだけでも恐ろしい。

「それでも……別の宿にするか？」

恐ろしい声音で訊かれ、ぶるぶると首を左右に振る。

「……ここにしましょう」

「……そうじゃな」

いかにも嫌々といった様子で、ミクリが扉を開けて中に入る。

その後ろをまるで隠れるようについていく。

やはり中もボロボロだった。ただ意外にも埃っぽくはない。

カウンターの向こうで、椅子に座りうとうととしている店の主人のところまで、おそろおそろ近づいていく。

老年の主人で、頭は完全に禿げていた。代わりにちりちりになった白く長い髭を蓄えている。ちよつと力を加えると、すぐに折れてしまいそうなほど、痩せている。

「ご主人」

肝が据わったのか、ミクリのはっきりとした声。

主人がゆつくりと二人を見る。

「泊まりたいのだが」

「……物好きだな」

主人が言う言葉だろうか。

「前払いで一日銅貨二枚。部屋は空いてるから好きなの使え。飯は出んぞ」

「分かった。とりあえず七日分。銅貨十四枚渡しておく」

カルシアから預かった袋から銅貨を取り出して渡す。

主人は小さな手で受け取ると、大事そうに懷に収め、またうたた寝を始めた。

リーラとミクリは顔を見合わせる。

「行くかの」

「はい」

鍵は受け取らなかった。どうせ付いていないだろうと思ったからだ。

一階に部屋は付いていなかったため、今にも抜けそうな階段を登り、二階の一室の扉をゆつくり開ける。

案の定鍵穴がない。中に入り、後ろ手に閉める。

「中は案外綺麗じゃの」

ミクリの言った通り、意外と綺麗だ。

ただしベッドが小さい。机には椅子が一つ付いているだけ。

明らかに一人用の部屋だ。

「他の部屋も調べてみるかの」

ミクリが出て行き、一人にされたくないリーラも付いていく。

だが結局全てが同じ部屋で、三階の一番奥の部屋から出る。

「二部屋取るわけにはいかないんですか？」

「それは止めたほうが良い。さっきも襲われたじゃろ？ 宿で襲われることは十分ありうる。ばらけているより、まとまってる方が良い」

「じゃあ……」

「まあ待て。主人に訊いてみよう」

「何を？ 全部一人用みたいでしたけど」

「ベッドを移動させていいかじゃ」

一階に戻り、主人に訊くと、出て行くときに戻していくなら構わないとのこと、さっそく二人は隣の部屋からベッドを移動させ、部屋の隅に置いた。

「ふう、これで何とかなるの」

「そうですね」

顔を見合わせ、どちらからとも無く、声をあげて笑った。

何がおかしいのか、分からない。

ただ、楽しかったのだ。

ひとしきり笑った後、することが無くなり、二人で街を探索に出る事にした。

もちろんミクリの案内で。

東大通りは一等地らしく、金持ちばかりが住んでいるとのこと、そちらには足を向けなかったのだが、南大通りは市場を兼ねていて、中央広場に負けない賑わいだとミクリは説明し、どうせなら南大通りに行こうという話になった。

行ってみると確かに南大通りは中央広場に負けない活気で、露店も多かったが、初日という事もあり、途中まで軽く見て宿に帰ることにした。

というよりも南大通りを歩くだけで重労働だったため、リーラが途中でへばってしまい、帰らざるを得なくなったのが真相だ。街の探索は明日以降に持ち越しとなった。

06 南大通りにて

ロトウール二日目。

リーラが起きたのは昼前だった。よほど疲れていたのかと、ベッドを整えながら思わず苦笑する。

向かいのベッドにはミクリの姿はすでに無く、きちんと片付けられていた。

どこへ行ったのだろうかと思ひ不思議に思っていると、扉の開く音と共にミクリが入ってきた。

手にはタオルと水の入った桶があった。

「おはようございます」

「おはよう。もう昼じゃがな」

ミクリが苦笑する。

「そろそろ起きるじやろうと思って用意してきた。身だしなみを整えたら、街へ出るぞ」

どうやら自分のために持ってきてくれたらしい。

ありがたく使わせてもらう。

顔を洗い、髪を整えながら、ふと気になったことがあり、今更ながらミクリに訊いてみた。

「昨日、私たちを襲ってきたのって十人ぐらいいましたよね？」

「いたな」

それがどうかしたか？

ミクリがそんな目でこちらを見る。

「そんなにいたのに、私に襲ってきたのが一人って、何かおかしくないですか？」

「なんじゃ、気付いとらんかったのか」

「はい？」

「何度か他の奴から斬られそうになったぞ。昨日ワシが斬ったのは、全部お主を斬ろうとした奴ばかりじゃ。止めるためにの」

「そうだったんですか……ありがとうございました」
ぞっとしない話だ。

斬りかかれたことにも気付かなかった。

ミクリがいなかったらと考えると……

思わず体がぶるっと震えた。

「なに、気にするな。お主は一人倒しただけでも十分過ぎるほどじや。何も出来ないと思っとったからの」

ミクリがカラカラと笑う。

いくらなんでもそれは酷い。

そう思うのだが、反面、ミクリが正しいような気もする。

自分があんなふうに戦えたのが、自分でも信じられない。

「なあに、これから強くなっていけばいいんじゃない。焦ることはない」
リーラの表情をどうとったのか、ミクリが慰めの言葉を口にした。
一瞬だけぽかんとしたが、微笑んでお礼を返した。

ようやく準備の整ったリーラは、ミクリに引き連れられて、中央広場まで来ていた。

「相変わらず、ここはすごいですね」

「ロトウールには商人が集まるからの。皆が皆、儲けようと集まって来る。もちろん手数料も掛かるが、それ以上に儲けがでかい」

「手数料ですか？」

「うむ。ワシも詳しくは知らんが、儲けの何分の一とかを政府に払っとるらしい」

「政府、ですか？」

「この街なら役場じゃな。ようは管理している所じゃ」

あまりこの手の話しに詳しいわけではないミクリは、リーラの質問攻めから逃げるべく、歩調を速めた。

いくつもの露店で広いはずの中央広場は、細い道が入り組むよう

な形になっていて、思うように前へ進めない。

いろいろな人とぶつかりながらも、ようやくと南大通りの手前まで来たときには、呼吸を整える必要があった。

「とはいえ、じっとしてゐるわけにもいかんの」

往来が激しすぎた。とても止まっている余裕など無い。ミクリはリーラにちらりと目をやった。

昨日もここで息を切らし、結局引き返す羽目になったのだ。

「飯はまだじゃったな？」

リーラに訊くが、まだなのはよく分かっていた。

南大通りには食べ物の店も多い。現に、どこからともなく香ばしい、いい匂いがしていた。

他では別の露店に匂いが付いたり、調理で周りを汚したりなどで嫌がられるのだが、南大通りだけは別だ。

むしろ食後のお客を捕まえようと、待ち構えている露店ばかりだ。だがミクリは露店には見向きもしなかった。

南大通りには露店だけではないのだ。

建物を構えて商売している店も多い。

ミクリはリーラを引っ張るようにして、そんな一つの建物の中に入っていく。

店の看板には『頂点』と達筆な文字で、でかでかと書かれていた。飲食店だ。

中は割かし混んでいて、二人が入ると何人かがちらりとこちらを見た。だがすぐに興味が無くなったようで、もとのお喋りに興じる。ただしそれは女性に限ったことで、男共のうち何人かはまじまじと見ていた。

——視線が気持ち悪い。

運よく一つのテーブルが空いていた。

多少居心地の悪い思いをしながらも、ミクリがすぐに歩み寄り、どかっと腰を落ち着けた。リーラも急いで向かい側に座る。

待つまでも無く店員が飛んできて、ミクリはリーラの注文を聞く

こともなく一気に頼んでしまい、店員は厨房の方へと走っていった。二人して料理が来るのを待っていると、ふと他の客の話し声が入ってきた。

「三日前に死神来ただろ？ あれ、反逆者を殺しに来たらしいぞ。もうかなり殺したとか」

「知ってる！ 死神カルシアでしょ？ 最強の死神って呼ばれてる人。カッコイイよね」

リーラの耳がピクピクと思わず動く。

「どうやらカルシアの噂らしい。」

「……最強の死神？」

リーラの聞いた事のない話だった。カルシアが自分のことを最強の死神なんて説明、喜ぶとも思えなかったので、説明しなかったのだろうと理解した。

「カッコイイって……あいつら、ただの人殺しだろ？ 反逆者も二

日間でかなり殺して、今は残党狩りとか」

「ちょ、ちょっと！ あんまり不穏なことは言わないほうがいいよ……。殺されるから」

二人の声がひそひそ声になり、店の喧騒にかき消されてリーラの聴力でも聞き取れなくなった。

人殺し。

その言葉だけが妙に頭の中に残ったが、かぶりを振って思考から追い出した。

一時間後、疲れも取れてお腹も膨れた二人は、ようやく店を後にした。

「あやつらの視線、今思い出しても気持ち悪いの」

ミクリが二の腕をさすっている。

「やっぱりそう思いました？」

「当たり前じゃ！ 食べてる間もずっとじろじろ、じろじろと！ 気持ち悪くてしかたなかったわ！」

『頂点』に入った時、ちらほらと何人かがこちらを見たのだが、時間が経つにつれ目を離した者がほとんどだった。

ただ、例外はある。

いつまで経ってもじろじろと見られ、リーラとミクリの二人は非常に鬱陶しい思いをしていた。

にも関わらず、一時間かけて食べていたのだから、二人の神経は結構図太い。

「今はあやつらのことなんぞ忘れて、店を回るかの。いろいろと面白そうじゃし」

アクセサリーを売っている露店に目をやりながらミクリが言った。

「ミクリはああいいうの、好きなんですか？」

「あんなやつらのことが好きならわけなからう」

何を言っているのかと目でも訴えかけてくる。

「そうじゃなくて」

リーラが視線をアクセサリーの露店にやると、ようやくミクリも気付いたようだった。

「ああ、見るのは好きじゃ。じゃが飾るのはあまり好きではないな。戦いの邪魔になるし」

ゆっくりとその露店へと近づく。

鳥を象った首飾りや花の指輪など、様々な動物や植物を象ったアクセサリーが並べられていた。

「何か買ってかい？」

気のよさそうな店主が声をかけてくるが、リーラには聞こえていない。

アクセサリーの中には、見たことも無いような動物を象ったものもあり、目を奪われていたのだ。

「これって動物ですよね？」

リーラが指差したのは小さな腕輪。模様として何かしらの動物の

ようなものが彫られていた。

口が伸びている動物で、背を丸め、まるで飛んでいるような格好をしている。非常に愛らしく、リーラは一目見て気に入ってしまった。

「これはイルカって動物だな。南の海にいるらしいが、俺も見たことないなあ」

店主が説明してくれる。

「へ〜……イルカかあ……」

リーラはちらちらとミクリに目をやる。

買って買って、と思いを込めて。

「仕方ないのう」

ミクリは苦笑しながらも腕輪を購入し、リーラに手渡した。

「ありがとうございます！」

喜んで受け取り、さっそく右腕にはめた。

「かわいい……」

小さく呟く。

うっとりとして見とれていたら、突然ぽんと肩に手を置かれた。

驚いて手を置いた主を見ると、先ほど『頂点』にいた軽薄そうな男の二人組だった。一人は黒髪だが、もう一人は少しだけ茶色が混じっている。

染めているわけでは無さそうだ。

「ねえ君たち暇かな？」

「俺たちとどっか遊びに行かない？」

「結構」

ミクリが拒否する。

だが男達は諦めない。

「そんな事言わずにさ」

「ぶすっとした顔しないでよ。可愛い顔が台無しだよ？」
非常に鬱陶しい。

「いえ、結構ですから」

リーラもまた拒否し、心配そうな顔をしていた先ほどの店主に軽く頭を下げ、ミクリと並んでその場を離れようとする。

だがあいにく、男達はその程度のことで諦めようとはしなかった。むりやり横に並んでくる。

南大通りで四人も並んでいたら非常に迷惑で、すれ違う人々から非難の目が男達に浴びせられる。

リーラたちに非難の目がいかないのは、彼女達があからさまに迷惑そうな顔をしているからであり、どちらが悪いか一目瞭然だからだ。

非難の視線にも負けず、男達は一生懸命に口説こうと頑張っている。

その努力を他にいかせばいいのに、と思うのは何もリーラに限ったことではない。

いきなりリーラの横に並んでいた黒髪の男が、リーラの肩を抱くように手を置いた。

切れた。

「私に触るな！」

男が一気に吹き飛び、露店を三つ突き破り、建物の壁に思い切り叩きつけられた。

むろんリーラが手で突き飛ばしたわけではない。

周囲がたちまちに静寂で包まれる。

何だ何だと、一斉に視線が集まってくる。

茶髪の男は驚きで呆然として、飛ばされ気を失った相棒を見ていた。

驚いたのは何も彼ばかりではない。

リーラもまた驚いていたし、ミクリもまた驚いていた。ミクリは男が痛い目にあったことで、口元に笑みを浮かべていたが。

「衝撃波、じゃな」

今まで出来なかった魔法の基本。

こんな時だが、リーラは少し嬉しかった。

07 弁償（前書き）

序章を細かい点で書き直しました。湯浴みを削除しています。序章は行間が開いてますが、一章はまだです。一章が終わった後、行間を含んだ細かい修正を予定しています

07 弁償

「一応これで任務完了じゃな」

「任務？」

「魔法を使えって言われとったろ？ 十分目立っておる」

「あ……」

すっかり忘れていた。

リーラは単純に怒りに任せて魔法を使っていたのだ。

そのおかげで衝撃波を習得——やり方を覚えたのでそちらの事ばかりに思考が行っていた。

だがよくよく周りを見渡してみると、自分たちを中心に大勢が取り囲んでいる。

いまや南大通りの注目の的である。

周囲の人々がこそそと噂しているのが、嫌でも耳に入った。

「今のって魔法？」

「え？ 俺見て無かったから」

「俺見てたぜ。急に吹き飛んだんだよ、あそこで伸びてるやつ。あーりゃ魔法だな」

「やっぱり。初めてみた」

そんな声があちこちから聞こえ、その度にリーラの耳がピクピクと動く。

急にどうしようかと不安になり、ミクリに訊いた。

「どうするかと訊かれても、の……」

ミクリもまた困惑し、伸びている男を見ていた。

もう一人の男はいつの間にか消えている。逃げたようだ。

「あんた！ 何やってくれたんだ！」

突然の怒声。

今まで男の横で放心状態だった露店の店主が、リーラに詰め寄ってきた。

何も、リーラやミクリ、男達ばかりが当事者ではない。

リーラが衝撃波で吹き飛ばした時、立派に被害を受けたのは露店を突き破られた店主も同様だった。

しかも具合の悪いことに、突き破った三つの露店は全てこの店主の経営であり、一番泣きたくなっているのも、この不幸な店主であった。

この街には行商人が多く集まり、販売は南大通りでという事が多い。手数料さえ払えば、同じ人がいくらだそうと問題は無いのである。

ただし手数料はその分高くなる。この店主はそれでも利益が見込めると思っていたのだが、露店が壊れたため、大赤字を出しかけているが、リーラやミクリにはそこまで察する洞察眼は無かった。

凄いい形で詰め寄られ、明らかに自分が悪いとリーラも思っていたので、ひたすらに謝るしかない。

「ごめんなさい」

頭を深く下げるが、もちろん店主はその程度で怒りが収まるはずも無い。

行商人は白髪が混じり始めた頭をしていたが、壮年といったふうでまだまだ働き盛りのように見えた。

中肉中背の男で、半分泣き顔に近い表情を浮かべながらも、同時に怒りを顔一杯に表現していた。

「ごめんなさいで済むか！ 大赤字だ！ 弁償しろ！」

リーラとミクリの二人は顔を見合わせ、困った顔をする。とても弁償できるほどのお金は無い。

「弁償と言われてもの……」

「私たち、そんなお金無いんです……」

「無いじゃ済まないだろ！ こんなに店壊しておいて！ なら今持っているだけ、全て出せ！」

無茶な要求をする。

相当に頭にきているようだ。

リーラとしても渡したい心持ちだったのだが、それをするとなヶ月間をお金なしで生活することになる。

簡単に領けなかった。

「大体、あの男が悪いんじゃない。変に絡んできたからの。あやつに請求するべきじゃろ」

ミクリが怒ったような口調で言った。

「もちろんあの男にも請求するさ。だが今はお前達だ」

店主の要求はぶれない。

とはいえ、払えるようなお金は無い。

どうしようかと困っていると、意外にも野次馬の方から助け舟が出た。

「スラム街の子から請求するのかよ！」

店主に対する野次。

どうやら昨日リーラ達がスラム街に行くのを見ていた、誰かのようだった。

人が多すぎて誰が言ったのか、さっぱり分からない。

「セコイこと言うな！」

「そんな可愛い子、困らせてんじゃないねえ！」

「金の亡者が！」

「守銭奴は街から消えろ！」

「その男から全部取れよ！」

最初の野次を皮切りに、どんどん野次が広がっていく。しかも原因であるリーラに向かってではなく、行商人に向かって。

可愛い正義なのである。

店主にとってはとんだ災難でしかない。

店を潰され、実に全うな要求をしたただけなのだ。彼の表情から怒りの色が徐々に消えていき、泣きそうな表情がさらに強くなった。

これ以上、店主として要求できなくなったのだ。

噂が広がる速さは想像以上に速い。

無理にでも請求したとなれば、不買運動にも繋がりがねず、さら

に大きく痛手を被ってしまう。

泣き寝入りするしかないのだ。

彼の表情を見て、リーラは申し訳なく思ってしまう。実際、悪いのはリーラである。

そしておずおずと声をかける。

「あの……、弁償以外で私たちに出来ることなら……」

ちゃっかり弁償以外と加えている。あまりに無茶な要求をされたら突っぱねる構えだ。

店主は泣き笑いのような表情を浮かべた。

「いや……もういいよ……」

諦めたような薄い笑みだった。

悲惨だった。

その表情を見て、リーラはますます申し訳なく思う。

ミクリがもう行こうと裾を引っ張ったが、まさか放っておくわけにも行くまい。

ふと、自分でも出来そうなことを思いついた。

「えっと……私働いて返しますから。もちろんお金は要りませんし、役に立つかどうかとも分からないんですけど」

「リーラ……」

ミクリが呆れた声をあげる。

「もういいと言ってるんじゃ。さっさと行くぞ」

冷たく言い放つ。自分たちは悪くないと信じているらしい。

だがリーラは動かず、店主を見ていた。

働くという提案を聞いた店主は、どうにも焦点の合わない目をしていた。

何かを考えているらしい。

なおも早く行こうと言うミクリを無視して、店主の言葉を待った。

「ふむ……なるほど、それなら……」

次はじろじろとリーラとミクリの全身を眺める。

品定めをするような目つきで、表情はすでに商人のそれになって

いた。

泣きそうな表情もはや無い。

「ふむ……働くか……」

ミクリが嫌そうな表情を浮かべている。

彼女にとってはどうにも良くない方向に、話しが進められそうだったからだ。

リーラは店主の判断をじっと待った。

いくらか減った野次馬達も同じように固唾を吞んで、店主の言葉を待っている。野次はすでに止んでいた。

店主が一頻り周りを取り囲んでいる野次馬を見渡した。

リーラも釣られて周りを見る。どうにも期待に満ちた目がちらほらと見えた気がした。

「獣人というのも悪くは無いか……。よし！ 働いて返してもらおうか」

たちまちに周囲から歓声があがる。

——何がそんなに嬉しいんだろう？

野次馬の不可思議な反応に、リーラは急に不安になって、ミクリへと視線を移したら、苦々しい表情をされた。次に大きなため息。

「あの……」

「まあ、仕方ないの。やはり弁償はせねばなるまいしな」

自分に言い聞かせるように呟く。

「なんで、皆喜んでるんですか？」

不思議でならなかった。

「あの店の制服があれじゃからな……」

ミクリが顎で指した方向を見ると、露出のかなり多い制服を着た女の人が立っていた。

青を基調とした服で、袖は二の腕の半分程度までしかなく、下は膝までしかない。

今の世の中で、女性は素肌を見せることはみだらな行為とされ、ありえないのだ。

その制服をヒラヒラしたもので可愛らしく飾っている。

「あれ、着るんですか……」

「そうなるの」

自分で言ったことだが、あれを着るとなると、どうにも嫌で仕方が無い。

しかし今更言えるわけも無かった。

「いや、君たちには別のものを着てもらう。新作があつてね、ちょっと試したいと思っていたとこだったんだ」

店主が笑顔で横から口を挟んだ。

リーラは内心ちよっと安心した。

——あれじゃなくて良かった。

ミクリもほっとした表情を浮かべている。おそらく自分も同じ表情を浮かべているのだろう。

「それじゃとりあえず着てもらうから、一度この建物の中に」

店主は男がぶつかった店を指差した。

——ここもこの人のお店？

店を構えるほどの商人なのだろうか、少し驚いてその建物を見た。

店主は先ほどの制服を着た数人に、ここを片付けるよう頼んでから、店へと入っていった。

二人は連れられるままに、その店へと入っていく。

建物は衣服屋のようなところで、露店の店主の知り合いが経営していた。

それだけでなく、露店を出している商人のある程度は、この店で着替えさせてもらっているらしい。

「そんなにぶすつとした顔しないで。お客さんには笑顔」
明るくそう言って笑うのは店主であるレイスだった。

彼がいくら言おうとも、リーラもミクリもそんな気分にはなれなかった。

確かに先ほどとは違う制服である。

だが着せられた制服は先ほどのと大差無い。

出された服は着物を改造したような服で、これまた太ももの半ばまでしかない。

代わりに腕は全部隠れているのだが、袖から伸びた長い袂が邪魔で仕方が無い。

リーラもミクリもどちらかといえば、着飾った格好よりも動きやすい格好を好むので、袂にはイライラさせられるのだ。

「うん、よく似合ってる」

レイスは先ほどまでの泣きそうな顔はどこへやら、満面の笑みで頷いている。

「ところで、その刀はやっぱり差したままじゃないと駄目かな？」

「これだけは譲れんの」

「そうか。まあいいかな、それも可愛げがある、と思うし」

ミクリは着物の制服にあの黒い刀を差していた。武器を手放すつもりは無いらしい。

レイスもしばらく困っていたのだが、結局「それでもいいか」と認めさせた。

「それじゃ、これから残った露店で働いてもらうけど、笑顔でね？」

今日はやる事覚えてもらうだけにするけど、お客さんには愛想よくね」

何度も同じ注意をされた後、リーラとミクリは衣服屋を出た。

08 売り子

衣服屋を出ると、二人は歓声の声に包まれた。一部からは感嘆のため息すらリーラの耳に届く。

店を取り巻くような人ばかり。

野次馬が増えていた……

「なんでこんなに……」

リーラはミクリの後ろに隠れる。

顔が上気するのを感じていた。

「こら、ワシの後ろに隠れるな！　ワシだって恥ずかしいんじゃない！」
よくよく見れば、ミクリの頬がほんのりと赤い。

隠れていたのを引っ張り出されるようにして、むりやり横に並ばされた。

大勢の視線に晒され、一気に顔が赤くなる。

「いや、やはり集客効果が絶大でしたな」

レイスは笑顔で何度も頷いている。

二人は今すぐこの場から逃げ出したかった。

だがあいにく状況がそれを許してくれない。

もし今逃げ出したら間違いない暴動になるだろう。大げさな比喻ではなく。

何にでもいいからとにかく終わらせたい二人は、レイスの露店を目で探す。

だが潰された露店はすでに片付けられていて、代わりに別の露店が用意されているわけでもなかった。どれがレイスの露店やらさっぱり分からなかった。

ついでに男もどこへやら片付けられている。

「とりあえずついてきて」

二人の様子を見たレイスが察して、動き出した。だが動き出すまでが遅かったので、二人は恨みを込めた視線を彼にぶつけた。

すぐに壁際の一つの大きめの露店へと案内された。

主に果物を売っている露店で、商品を置くいくつもの台で足が隠れ、ようやくある程度落ち着いた。

ただし、横からは丸見えなので、不心得者が横から覗こうとしていた。

「お客さん、今日はこちらは駄目ですよ」

レイスが笑顔で断りを入れる。

——今日は？

嫌な予感しかしなかったが、少なくとも今日は守ってくれるらしい。

「それじゃ説明始めましょうか。基本的に君達には売り子として働いてもらいます」

レイスがまじめな口調で説明を始めた。

とはいえ内容はたいした事は無い。

商品の値段を覚えるのが多少面倒だけで、あとはとにかく愛想を振りまけ、ということだ。

覚えるまでは元々露店で販売していた、あのフリフリのついた制服を着たおばさんが教えてくれるらしい。彼女の名前はマミラというらしい。

それにしても……

——せっかく制服は可愛いのにな。

着たくは無いが、この太ったおばさんが着けていても似合わない。

むしろお客さんが逃げそうな気さえた。

「それじゃ、あとはよろしく」

「はいはい、任せなさいな」

マミラはドンと胸を叩く。

レイスは少し離れて様子を窺うようだった。

とたんに今まで取り囲んでいた野次馬が、一斉に注文を始めた。

「うわわ……」

リーラとしてはうろたえるばかりだ。

次々に商品を手にとって「これ頂戴」と声をかけてくるが、どうしていいか分からない。

ミクリにも同様に注文が殺到していて、これまた同じようにうろたえているように見えた。

これほどうろたえたミクリを見るのは初めてだったので、こんな時でありながらおかしく、返って頭の中が冷静になった。

「落ち着きなさいな。値段教えていくから、ちゃんと代金受けとって。一人一人正確にね」

マミラの落ち着いた声。

安心できる声だった。

「りんごは一つ銅貨二枚だよ」

「はい」

できるだけ元気に答える。

——泊まってる宿、りんごと同じ値段なんだ。

ちょっと切ない思いを感じながら。

「銅貨二枚です」

すぐに銅貨二枚が渡され、少しだけ男のお客さんと手が触れた。

背筋がぞくつとする。

自分の中で魔力が暴れるのを感じ、必死に理性で押さえ込む。

——感情が爆発すると、魔力が暴走することがある。暴走した魔力は、普段以上の力を発揮するから危険だ。そんな時は出来るだけ冷静に自分を見つめることだ。自分の中にもう一人、冷静な自分を作れ。

カルシアの言葉を思い出したリーラだったが、とても出来そうになかった。

——それが無理なら、理性で押さえ込むしかないが、これは難しい。

そうも言っていた。だが前者が出来ない以上、こちらしかリーラには選択肢はなかった。

リーラの意味に関わらず、魔力の方が攻撃態勢に入ろうとしている

る。

いまここで、衝撃波なんてやればさっきの二の舞である。目を瞑り、必死に押さえ込んでいく。

「リーラ？　どうかしたかの？」

ミクリが心配そうに訊いてきたが、返事をする余裕が無い。顔には冷や汗が流れる。

……ようやく落ち着いてきた。

「いえ、何でも……」

ミクリにこわばった笑みを向けた。

「これぐらいでへばっちゃ駄目だよ。ホラ、次のお客さんの対応」
マミラが急かす。

リーラは慌てて次のお客さんの対応をし、ミクリも怪訝そうな顔だったが、別のお客さんの対応を始めた。

十分ほど、二人は売り子として働いていた。説明だけと言っていたが、お客さんの数がそれを許してくれなかったのだ。

いくつかの商品の値段を覚えたため、リーラはある程度なら訊かなくても対応できるようになっていた。

ただし、未だ恥ずかしさは抜けない。

隣のミクリを盗み見る。

「この葡萄じゃな。まいどー」

お金を受け取りながら元気に答える。

「どうも、ねえ今度一緒に食事しない？」

「葡萄一つでワシと一緒に食事など、千年早いわ」

ナンパにも軽口で答え、声をあげて笑う。

もはやノリノリである。開き直りかもしれない。

どちらにしてもリーラには真似できそうにもなかった。

「このミカンを」

「はい」

次のお客さんの注文だ。

「笑顔を忘れちゃ駄目だよ。それは銅貨一枚」

マミラが注意する。

「それは銅貨一枚です」

引きつった笑顔で答え、銅貨を一枚貰う。手は触れなかったが、そのお客さんはミカンを持っていこうとしなかった。

「あの、何か？」

「渡してくれる？」

「え、えっと、はい……」

普通はお客さんの方で取って持っていく。

——自分で取ればいいのに。

内心不満を感じながらも、片手で、少しぞんざいにミカンを差し出した。

するとその客は両手でミカンごとリーラの手を握ってきた。

全身が凍った。

ようやくと押さえつけた魔力が再び暴れだす。

先ほどの比ではない。

未だ手を握っている男の顔を見る。不細工な笑みを浮かべた男だった。

にやにやと笑っている。

全身で暴れていた魔力が体から漏れ出した。

蒸気のような白く細い湯気がリーラから流れていく。

風がリーラを中心にして巻き上がり、露店の布で作った屋根がバサバサと悲鳴をあげる。

「リーラ！」

異常に気がついたミクリの慌てた声。

目の前の男もすでに笑いが収まっている。何が起きているのか、理解できないという様子だった。

周囲の客も突然の異変に目を丸くしていた。

商品が風で揺れる。吹き飛ばないのはリーラが抑えようと努力している結果だが、それも限界に近い。

まだ大きな被害は出ていないが、露店が吹き飛ぶのも時間の問題のように思われた。

ミクリが何か言っているが、聞く余裕も無い。

目を瞑り、全身を魔力の操作に集中するが、いう事を聞いてくれない。

突然に全身に圧力がかった。何か分からない。誰かが中に入ろうとしている、そんな圧力だった。

ただ、その圧力に悪意は感じられない。

圧力を発している何かがリーラの全身に纏わり付いた。ようやく分かった。

魔力だ。

誰かの魔力が、リーラの暴走を止めようとしていた。

暴走し、漏れ出した魔力が段々と弱まるのを感じる。

すでに風は収まり、魔力の放出も止まっていた。

体内で暴走している魔力も沈静化の一途を辿っている。

リーラは大きく深呼吸し、ようやく人心地ついた。

——もう安全だ。

そう判断した時、誰かの魔力がリーラから消え、体が軽くなったのを感じた。

目をゆっくりと開ける。いつの間にか呼吸が荒くなっており、汗が顔を流れるのを感じた。

リーラは今までミカンを差し出した格好で止まっていた。

手を握ってきた男はすでにその手を離している。

「……どうぞ」

息を整えながら言うと、男は怯えたようにさっとミカンだけ取って、どこかへ去って行った。

「今のって……」

誰かのポソリという声。

「すげえ……」

「魔法？ 今のが？」

似たような声がいくつも重なり、聞こえた。興奮した声と驚愕の声、そして恐怖の声。様々な感情の声がリーラの耳に聞こえた。

「リーラ、大丈夫じゃったか？」

ミクリが心配そうに声をかけてくる。

「はい、何とか……、危なかったですけど」

「全くじゃ」

ほっとしたような表情を見せる。

かなり心配をかけてしまったらしい。

「右の後ろの方。あいつがおらんんだら、危険じゃった」

ミクリが顔を寄せ、小声で言った。

言われた方向を盗み見ると、ボロボロのマントを羽織ったカルシアがいた。緋色の目でこちらをじっと見つめている。怒ってでもいるかのような表情だった。……暴走させたから本当に怒っているのかもしれない。

——さっきの魔力はカルシアさんだったんだ。

合点がいった。

強力な魔力。

暴走などものともせずには押さえ込めるような。

魔力を扱える者は少なく、居たとしても暴走を押さえ込めるような、そんな魔力の持ち主はそうそう居ないと、教えられていたので少し不思議だったのだ。

カルシアを見て、ようやく一息ついた時、離れていたレイスが駆け寄ってきた。

カルシアの方はそれと同時に、背を向けて立ち去っていく。その後ろを誰かがついて歩いているようだったが、レイスが来たためはずきり見られなかった。

「リーラちゃん、どうしたの？ 大丈夫？」

レイスが心配そうに聞いてきた。

「はい。もう大丈夫です。ご心配おかけしました」

「そう？　でも今日はもう帰った方がいいね。ゆっくり休んで明日また来てよ」

声音が優しい。二人に予想以上の集客効果があったからなのか、本当に心配しているのか、あるいは両方か。

何にしろ、帰ってもいいというなら、有難く帰らせてもらうことにした。

「分かりました、それでは私達は今日はこれでこの服を早く脱ぎたいのだ。」

「うん、また明日」

レイスに丁寧なお辞儀をして、着替えるために建物に向かう。

ミクリは軽く頭を下げてただけだった。

ミクリが隣に並ぶ。

「……本当に明日も来る気か？」

眉根を寄せて、訊いて来る。

「そうですけど？」

「……そうか、いや、何でもない」

ミクリが大きなため息をついた。やはりあれは開き直りだったらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362y/>

殺人教会の死神様

2011年12月2日19時47分発行